西善毘沙門遺跡

道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024.3

前 橋 市 教 育 委 員 会

西善毘沙門遺跡

道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024.3

前 橋 市 教 育 委 員 会

は　じ　め　に

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。律令時代になってからは、総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた前橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西善毘沙門遺跡は、本市南部に広がる平安時代の水田跡の調査で、令和３年には北側の産業用団地造成時にも調査を行っています。現代広く営まれている水田は、古代においても耕作されていましたが、浅間山の噴火に伴って降下した軽石で一度埋没してしまいました。当時の人びとには大きな被害をもたらしましたが、発掘調査においては手掛かりとなります。今回の調査では、この軽石の堆積があまり残っていませんでしたが、わずかな手掛かりをたよりに調査を進め、水田耕作が行われていたことを確認しました。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和６年３月

前橋市教育委員会
教育長　　吉　川　真由美

例　　言

１．本報告書は、道路築造に伴う西善毘沙門（にしぜんびしゃもん）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．発掘調査および整理作業は、前橋市より委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が、前橋市教育委員会の指導・監理のもとに実施した。

３．発掘調査の要項は次のとおりである。

遺　跡　所　在　地	前橋市西善町 971 ほか
遺　跡　コ　ー　ド	5G80（前橋市 0388 遺跡）
発　掘　調　査　期　間	令和５年 11月８日～令和５年12月25日
整理・報告書作成期間	令和５年 12月26日～令和６年３月13日
発 掘 ・ 整 理 担 当 者	井上太・上原真澄（有限会社毛野考古学研究所）
測　量　担　当　者	田村貴広（有限会社毛野考古学研究所）

４．本書は前橋市教育委員会の指導・監理のもと、上原が編集し、井上が監修した。執筆はＩを並木史一（前橋市教育委員会文化財保護課）が、その他を上原が担当した。遺物写真撮影は井上が行なった。

５．発掘調査で出土した遺物および図面・写真などの資料は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

６．発掘調査・整理作業に係わった方々は次のとおりである。

【発掘調査】新井次男・荒井滋道・岡田正敏・金井雅之・亀井邦之・新開昌代・関根勝・堀口満夫
松井昭光・宮澤秀昭

【整理作業】閑野一枝・富澤友理・真下弘美

凡　　例

１．座標値は世界測地系を使用し、水準値は海抜標高（m）を示す。

２．グリッドは、原点（X=37,300･Y=-67,400）より、西から東へＸ０、Ｘ１…、北から南へＹ０、Ｙ１…と付した。

３．遺構の略称は、次のとおりである。Ｗ：溝跡　Ｄ：土坑　ＳＸ：不明遺構

４．各図版の縮尺は 1/40・1/80 とし、各々にスケールを付した。

５．遺物写真の縮尺は陶磁器・ガラス製品は 1/2、礫は 1/3 である。

６．遺構図中の推定線は破線で表現した。

７．本文・挿表中の計測値において、［　］は残存値を、（　）は推定値を表す。

８．遺構覆土の色調観察は、農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006『新版標準土色帖』に拠った。

９．本書で使用したテフラ（火山噴出物）の略称と降下年代は以下の通りである。なお、降下年代は、町田洋・新井房夫 2011『火山灰アトラス（第２刷）』東京大学出版会による。

As-A: 浅間Ａ軽石（1783 年）

As-B: 浅間Ｂ軽石（1108 年）

Hr-FP: 榛名二ッ岳伊香保テフラ（６世紀中葉）

Hr-FA: 榛名二ッ岳渋川テフラ（６世紀初頭）

As-C：浅間Ｃ軽石（３世紀後半）

目　　次

はじめに
例言／凡例／目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　調査方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の位置と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……4
Ⅳ　基本層序……7
Ⅴ　遺構と遺物……9
　1．概　要……9
　2．As-B 層下水田跡……9
　3．溝　跡……10
　4．土　坑……24
　5．ＳＸ－１……25
Ⅵ　まとめ……26

写真図版
抄録／奥付

挿図目次

Fig.1　調査区域図……2
Fig.2　遺跡位置図……3
Fig.3　遺跡分布図……5
Fig.4　基本層序……7
Fig.5　全体図……8
Fig.6　As-B 層下水田跡（1）……9
Fig.7　As-B 層下水田跡（2）……10
Fig.8　溝跡（1）……11
Fig.9　溝跡（2）……12
Fig.10　溝跡（3）……13
Fig.11　溝跡（4）……15
Fig.12　溝跡（5）……16
Fig.13　溝跡（6）……17
Fig.14　溝跡（7）……18
Fig.15　溝跡（8）……19
Fig.16　溝跡（9）……19
Fig.17　溝跡（10）……20
Fig.18　溝跡（11）……20
Fig.19　溝跡（12）……21
Fig.20　溝跡（13）……22
Fig.21　溝跡（14）……23
Fig.22　溝跡（15）……24
Fig.23　Ｄ－１号土坑……24
Fig.24　ＳＸ－１・Ｗ－25 号溝跡……25
Fig.25　１～３区　Ⅶａ層堆積と掘り込み範囲……27
Fig.26　本遺跡周辺の耕作地と環濠遺構群……27
Fig.27　本遺跡周辺の条理制地割と
　　中近世の溝跡……27

表目次

Tab.1　周辺の遺跡一覧表（1）……5
Tab.2　周辺の遺跡一覧表（2）……6
Tab.3　周辺の遺跡一覧表（3）……6
Tab.4　水田跡計測表……10

写真図版目次

ＰＬ．1　調査区遠景（南東から）
　　作業風景（南から）
ＰＬ．2　調査区全景（上が北）
ＰＬ．3　１区　全景（東から）
　　２区　全景（西から）
　　３区　全景（北から）
　　３区　Ｗ－９・13　全景（東から）
　　３・４区　Ｗ－１・２・８・10・18～20・36
　　全景（北から）
ＰＬ．4　３区　Ｗ－15～17　全景（東から）
　　４区　Ｗ－１・２・８・36　全景（北から）
　　５区　Ｗ－21～25、ＳＸ－１　全景（北から）
ＰＬ．4　５区　Ｗ－26～29　全景（東から）
　　６・12 区　１・２号畦畔　全景（南東から）
　　６区　１号畦畔　近景（南西から）
　　６区　１号畦畔　断ち割り断面（東から）
　　６区　１号畦畔　断ち割り断面（西から）
ＰＬ．5　11 区　Ｗ－１・２・33　全景（北から）
　　11 区　Ｗ－１　遺物出土状況
　　（木杭・礫・陶磁器）
　　基本層序４　土層断面　４区（西から）
　　基本層序６　土層断面　６区（西から）
　　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

（都）西善玉村線（市道　00-105 号線）道路築造にあたり、令和５年１月 23 日付で前橋市長　山本　龍（道路建設課）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年２月８日及び９日に試掘確認調査を実施した結果、平安時代水田跡等を確認した。また、同年２月 24 日に文化財保護法第 94 条第１項の通知がなされ、工事計画が示された。都市計画道路築造という工事計画から、遺構の現状保存のための計画変更は困難であり、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至った。

令和５年 10 月 11 日付で、前橋市より埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であったことから、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することとした。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 11 月６日付で前橋市と民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「西善毘沙門遺跡」（遺跡コード： 5G80）の「西善」は町名、「毘沙門」は旧小字名を採用したものである。

Ⅱ　調査方法と経過

発掘調査は令和５年 11 月８日～令和５年 12 月 25 日まで実施した。11 月８日に基準杭の設置や仮設トイレ・器材・重機（0.25 ㎥バックホー・クローラー）の搬入を行なった。同日、西側の調査区１区から南に向かって重機掘削を開始した。掘削の切り返しを行なうため､西側の調査区（１～４区）で表土掘削をいったん終了した。13 日からジョレンで遺構確認作業を開始し、移植ゴテで遺構掘削を行なった。21 日に１～３区までの調査範囲の市教委による終了検査を終えた。25 日～ 29 日に４～６区と７～ 12 区の表土掘削を開始した。並行して、調査終了範囲の埋め戻し作業を行なった。29 日から人力による遺構精査と掘削作業を再開し、12 月７日に４～６区と７～ 12 区の調査を終了した。12 月 14 日から仮設トイレ・器材の撤収作業を始め、測量業務や埋め戻し作業を行ない、25 日に現地でのすべての作業を終了した。

遺構は土層堆積状況の観察のためのベルトを設定し、記録後完掘した。遺構や出土遺物、土層断面写真の撮影は必要に応じて適宜行なった。平面測量はトータルステーション(Topcon GTseries XQ)､空撮はミニドローン(DJI Mini 3）を使用した。記録写真は 35mm フィルム（モノクロ･カラーリバーサル）とデジタル（NikonD5500/2416 万画素）を併用した。また、遺跡全体の３Ｄモデルを iPAD を使用して作成した（使用したアプリケーション：Scaniverse、Metascan)。

整理作業は令和５年 12 月 26 日に開始し、出土した遺物の洗浄・注記作業を終了し、掲載用遺物の写真撮影（NikonD850/CarlZeiss Milvus1.4/50・2/135mm）を行なった。並行して遺構第２次原図の作成（Adobe Illustrator CS2・CS6）や原稿執筆・編集作業（Adobe Indesign CS2）を実施した。

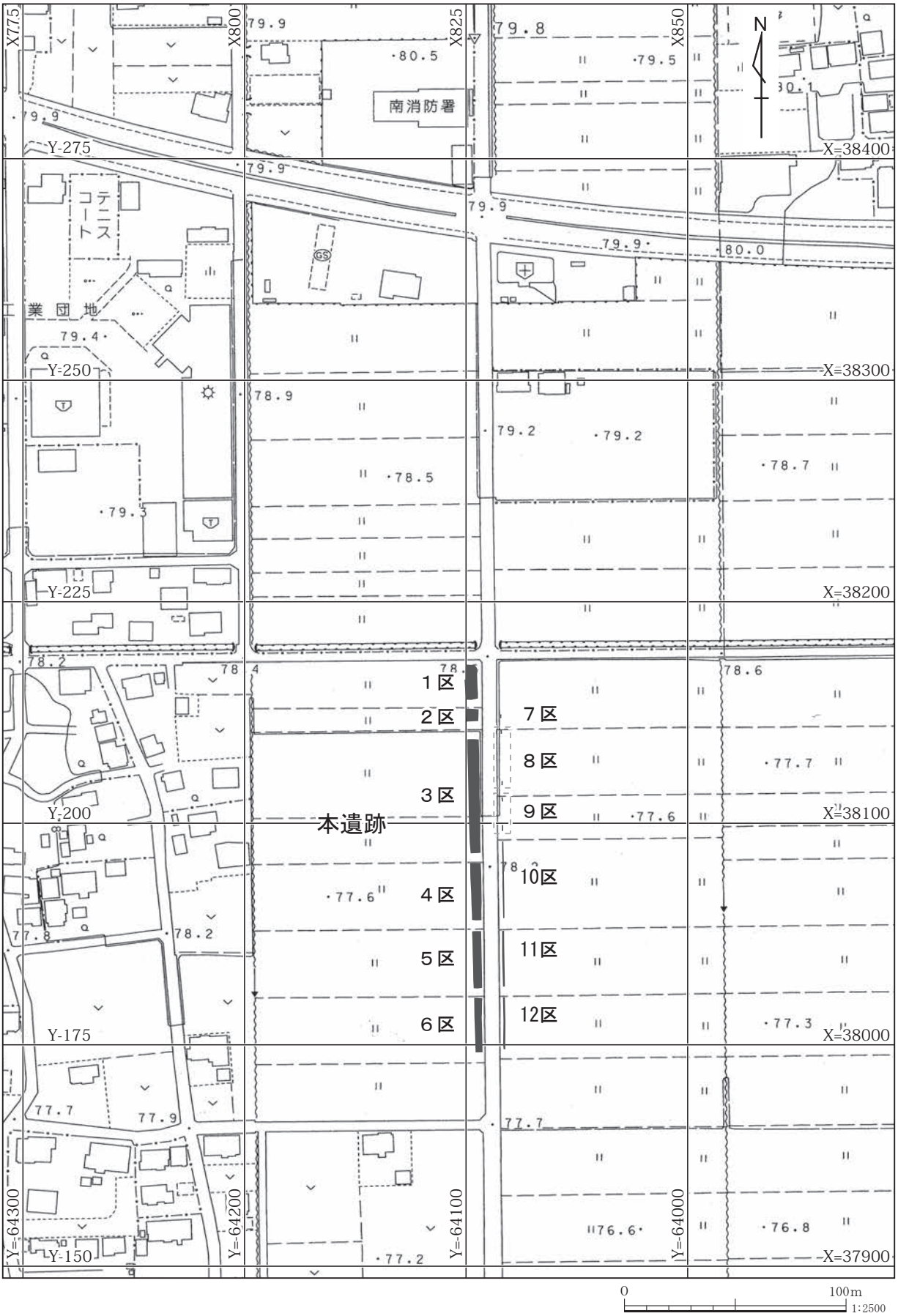


Fig.1　調査区域図（前橋市役所発行『前橋市地形図』1/2,500 を使用）

Ⅲ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

西善毘沙門遺跡は群馬県前橋市西善町に所在する。前橋台地上の後背低地[注1]に立地（標高約 77～78m）し、北西から南東に向かって緩く傾斜している。調査地では昭和 40 年代に県営前橋南部土地改良により圃場整備事業が行なわれている（前橋南部土地改良史 1994）。

前橋市の地形要素は主に、市北東部の「赤城火山斜面」、南西部の「前橋洪積台地」、台地東辺の地溝状の沖積低地の「広瀬川低地帯」と「現利根川氾濫原」から成る。前橋台地は、扇状地性の前橋礫層上を浅間山の山体崩壊による前橋泥流堆積物や岩なだれ堆積物（推定 27Ka）が堆積し（矢口　2001）、その上を火山灰質シルト層が被覆している。前橋台地は広瀬川低地帯の面よりも一段高く、ほぼ平坦に近く北西から南東に緩く傾斜している。そのほぼ中央を利根川が貫流し、分流した中小河川によって浸食・堆積作用を受けている。赤城火山の山麓崖と前橋台地の北東の崖に挟まれた広瀬川（旧利根川）は、応永又は天文年間に変流し、当時の景観に大きな影響を及ぼしたものと思われる。

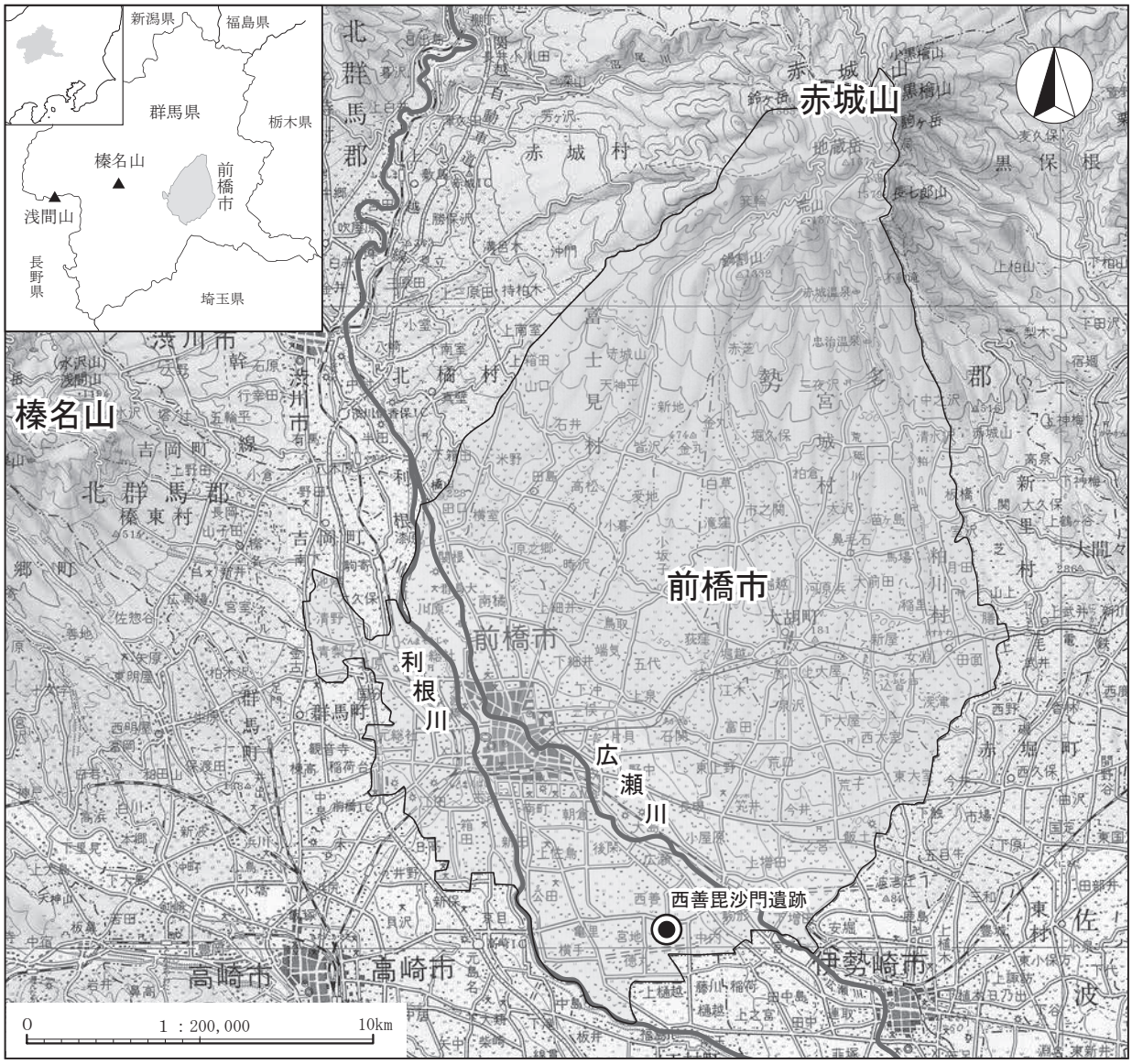


Fig.2　遺跡位置図（国土地理院発行『長野』・『宇都宮』1/200,000 を改変）

本遺跡の西側を藤川[注2]が流れていて、端気川[注3]が西方で並行するような形で南東流し、利根川に合流する。また、本遺跡の西側の南北に延びる微高地を境に周辺用水路の流水方向が変わることから地形変換地点といえる。

現在、本遺跡周辺では米・麦の二毛作[注4]が行なわれている。水田地の景観は、第二次世界大戦後の農地改革や、田圃整備事業などにより一区画が大型化・画一化しており、近現代の生産性を考慮した稲・麦作への収斂傾向（溝口 2002）は、本遺跡周辺でも見て取れる。昭和23年米軍撮影の空中写真[注5]では、小区画の田と畠が混在する様子を見ることができる。明治期の迅速測図[注6]では昭和の空中写真に比べ畠の割合が多く、水田の中に島畠状の畠が存在する区画も窺える（Fig.26）。今回、調査した範囲も迅速測図では畠地になっている。また近年、県道高崎駒形線沿線の開発で、遺跡周辺の農地は減少傾向にあり、工業団地やそれに付随する施設の建設が相次いでいる（茂木 2021）。本調査も、交通量や大型車の増加に伴う道路築造工事の一環の調査である。

注１：台地上に樹枝状の分布で全域に及ぶもので、台地上の微高地を構成する堆積物などを侵食した谷を埋める湿地性堆積物や規模の小さな埋没谷を形成する河川堆積物によって構成されている（矢口 2001）。
注２：改修前の藤川は大雨のたびに氾濫をおこして、周囲の田圃が水浸しになったといわれている（前橋南部土地改良史 1994）。
注３：もとの自然流路を旧利根川から取水するように改修した、南部農耕地帯の幹線用水路である。
注４：明治９年の元西善村の物産取調帳に記されている生産物として米・大麦・小麦・大豆・小豆・胡麻・生糸・芋などがあり、少なくとも明治期には二毛作が行なわれていた可能性が強い（西善町矢田自治会文書）。二毛作の普及は中世から始まったと考えられる（木村 1992）。
また、明治初頭の壬申地券地引絵図でみられる遺跡周辺の土地は下田・麦、畠地が多いことが窺える（明治５～６年 上野国那波群西善村壬申地割地引絵図）。
注５：国土地理院の空中写真閲覧サービス、1948/04/06 米軍撮影の空中写真を参照した。
注６：歴史的農業環境閲覧システムで閲覧できる明治初期から中期にかけての「迅速測図」を参照した。

２　歴史的環境

周辺の歴史環境を各時期ごとに注目される要素を示し、関連する遺跡と共に概観していく。

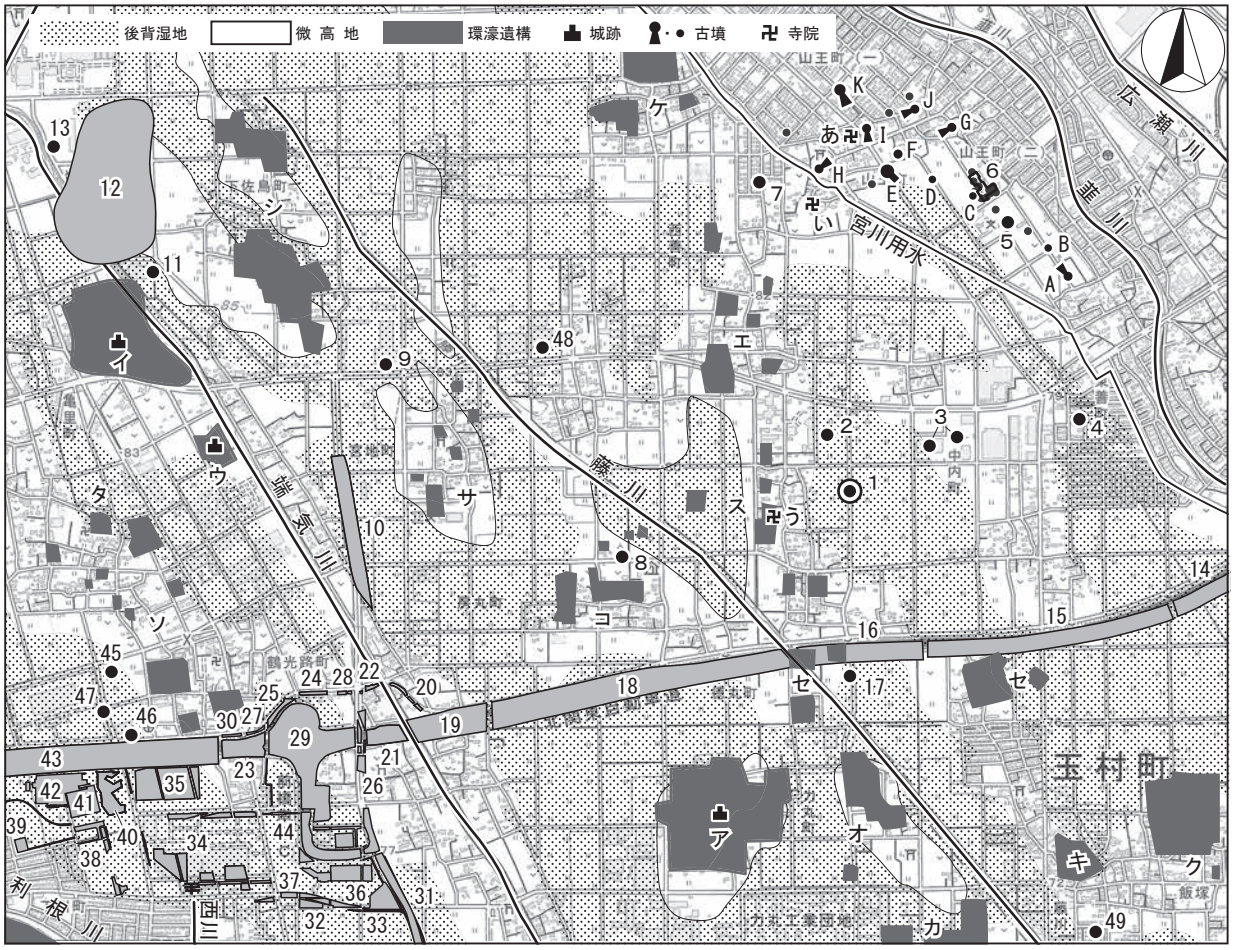
本遺跡周辺では縄文時代草創期から生活痕跡を認められるが、利根川南西部や広瀬川北東部に比較すると弥生時代までは遺跡数が少ない地域である。縄文時代の代表的な遺跡として、微高地上の西善尺司遺跡（16）における中期の石器製作址、山王若宮Ｖ遺跡（５）での住居跡が挙げられる。弥生時代には北西の椚島（ぬでじま）川端遺跡（中期）や南東にある一万田遺跡（後期）の再葬墓が見受けられる。

当該地域に顕著な景観の変化が現れるのは古墳時代からである。この時期から、遺跡数が増加傾向となり、微高地上には集落の形成、低地では水田開発が行なわれ、広瀬川右岸部の自然堤防上に古墳が築造され始める。

前期における集落遺跡の特徴として、低地に立地し周溝をめぐらす形態の住居跡が多数確認されている。また近隣の西善尺司遺跡では集落に隣接した微高地上に方形周溝墓群が検出されている。３世紀後葉から水田跡が徐々に見え始め、様々な火山噴出物や洪水（As-C 混入土、Hr-FA 軽石・洪水層、Hr-FP 軽石・泥流層）で埋没した水田跡が各地で調査されている（Tab.1・2）。これらの集落や生産域を統制した権力者の墳墓群が広瀬川右岸に密集している。

奈良・平安時代には律令制の導入により中央集権的な体制が確立し、その一端として前橋市元総社町付近では国府が造営され、前橋台地では９世紀初頭頃から条里制地割による開発が展開されている。As-B 直下の水田跡が北関東自動車道や南部拠点地区土地区画整理事業などの調査により、広範囲で検出されている。本遺跡周辺では、集落は古墳時代を踏襲するような形で微高地上に広がりを見せ、特に台地の南東側（西善尺司遺跡、中内村前遺跡（15）、前田遺跡（14））に大規模な集落が営まれている。台地や微高地を除く平坦地の大部分では水田開発が行なわれている。

「倭名類聚抄」に記載されている本地域は、那波郡田後郷に属しており、東は変流前の旧利根川の対岸に佐位郡や勢多郡があり、西には群馬郡があったと想定されている（石守 2004）。本遺跡の地名にもある「西善」村は那波郡善養寺に属する領地の意味と想定され、新田郡長楽寺所蔵の元徳３（1331）年の下知状に寺名が記



1．本遺跡　2．西善福録遺跡　3．西三並遺跡　4．前田Ⅰ～Ⅶ遺跡　5．山王若宮Ⅴ遺跡　6．山王若宮Ⅰ～Ⅳ遺跡　7．西善鍛冶屋遺跡
8．房丸桜町遺跡　9．東田遺跡　10．宮地中田遺跡　11．川曲遺跡　12．朝倉工業団地遺跡群 No.1～7　13．下佐鳥遺跡　14．前田遺跡
15．中内村前遺跡　16．西善尺司遺跡　17．西善尺司Ⅲ遺跡　18．徳丸仲田Ⅰ～Ⅳ遺跡　19．徳丸高堰Ⅰ・Ⅱ遺跡　20．徳丸高堰Ⅲ・Ⅳ遺跡
21．鶴光路榎橋遺跡　22．鶴光路榎橋Ⅱ遺跡　23．西田Ⅲ遺跡　24．村中遺跡　25．西田Ⅳ遺跡　26．西田Ⅱ遺跡　27．西田Ⅴ遺跡　28．西田Ⅵ遺跡
29．西田遺跡　30．村中Ⅱ遺跡　31．下阿内前田遺跡　32．南部拠点地区遺跡群 No.1　33．南部拠点地区遺跡群 No.2　34．南部拠点地区遺跡群 No.3
35．南部拠点地区遺跡群 No.4　36．南部拠点地区遺跡群 No.5　37．南部拠点地区遺跡群 No.6　38．南部拠点地区遺跡群 No.7
39．南部拠点地区遺跡群 No.8　40．南部拠点地区遺跡群 No.10　41．南部拠点地区遺跡群 No.11　42．南部拠点地区遺跡群 No.12
43．横手湯田遺跡，同Ⅱ～Ⅵ　44．下阿内壱町畑遺跡　45．鶴光路油免遺跡　46．鶴光路練引遺跡　47．亀里油免Ⅱ遺跡　48．西善壱町田遺跡
49．藤川前遺跡
ア．力丸城　イ．宿阿内城　ウ．阿内古城　エ．西善環濠遺構群　オ．東力丸環濠遺構群　カ．徳丸東環濠遺構群　キ．藤川環濠集落
ク．飯塚環濠遺構群　ケ．山王環濠集落　コ．房丸東環濠遺構群　サ．東宮地環濠遺構群　シ．下佐鳥環濠集落　ス．旧西善環濠遺構群（須田屋敷）
セ．横堀環濠遺構群　ソ．鶴光路亀里環濠遺構群　タ．前田屋敷
A．東善大塚古墳　B．上陽村 33 号墳　C．上陽村 10 号墳　D．狐塚古墳　E．阿弥陀山古墳　F．文殊山古墳
G．上陽村 12 号墳　H．禅養寺東古墳　I．上陽村 13 号墳　J．上陽村 17 号墳　K．山王金冠塚古墳
あ．禅養寺　天台宗（1169 年）　い．視昌寺　曹洞宗（1506 年）　う．明覚院（元禅養寺）

Fig.3　遺跡分布図（国土地理院発行『前橋』・『高崎』1/25,000・松本 2023 を改変し、作成）

Tab.1　周辺の遺跡一覧表（1）　（和久 2012 を改変し、作成）

遺構の種別／遺跡表示番号			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
古墳時代	水田跡	As-C 混土層																														
		As-C 混土層上																														
		As-C 混土層下																		○						○					○	
		Hr-FA 層下												○			○	○		○											○	
		Hr-FA 洪水層下																														
		Hr-FP 層下												○																		
		Hr-FP 泥流層下																														
	竪穴住居跡						○	○		○			○	○	○		○	○		○												
	その他の遺構	土坑						○									○	○	○	○					○							
		溝						○									○	○	○	○					○							
奈良・平安時代	水田跡（As-B 層下）		○	○	○	○						○		○		○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○		○	○	
	竪穴住居跡					○			○	○				○		○	○	○	○	○		○	○	○				○		○	○	
	その他の遺構	土坑							○							○			○	○	○		○					○	○			○
		溝				○			○	○						○			○	○		○	○	○					○			○
		畑																○														
中・近世	水田跡	As-B 混土層																														
		As-A 層下																														
		復旧溝など																														
	その他の遺構	館跡など														○		○		○						○						
		火葬土坑																○	○													
		土坑墓																								○					○	
		溝	○	○	○		○		○					○		○	○	○		○	○	○	○	○	○		○				○	
		井戸							○									○				○	○									

Tab.2　周辺の遺跡一覧表（２）（和久 2012 を改変し、作成）

遺構の種別／遺跡表示番号			31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
古墳時代	水田跡	As-C 混土層																			
		As-C 混土層上																			
		As-C 混土層下																			
		Hr-FA 層下	○				○	○	○						○	○					
		Hr-FA 洪水層下												○							
		Hr-FP 層下													○						
		Hr-FP 泥流層下																			
	竪穴住居跡											○	○	○	○						
	その他の遺構	土坑	○																		
		溝	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○					
奈良・平安時代	水田跡（As-B 層下）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	竪穴住居跡														○						
	その他の遺構	土坑																			
		溝		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○						
		畑																			
中・近世	水田跡	As-B 混土層																			
		As-A 層下																			
		復旧溝など	○													○					
	その他の遺構	館跡など																			
		火葬土坑																			
		土坑墓																			
		溝		○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	
		井戸																			

Tab.3　周辺の遺跡一覧表（３）（群馬県教育委員会 1988 を参照し、作成）

遺跡表示番号／遺構の種別	時期	築・在城者	遺構				備考
			堀	土居	戸口	他	
ア	15・16C	力丸氏	○	○	○	根小屋	文献『永禄日記』『藤生文書』
イ	16C	三輪右丹	○	○	○	櫓台、根小屋	
ウ	15C 後（文明 9 年）	上杉顕定					文献『松陰私語』
エ	16C		○	○			６ヶ所の環濠遺構。
オ			○				
カ			○				
キ			○				
ク	16C 後（天正年間）	宇津木氏	○			惣堀	文献『宇津木氏文書』『田口文書』。11 ヶ所の環濠遺構。
ケ			○			惣堀	２ヶ所の環濠跡。
コ							数ヶ所の環濠跡。
サ			○				数ヶ所の環濠跡。
シ			○				数々の宅地が共有の堀で囲まれている。
ス	16C	須田氏	○			２重の堀	明覚院（元禅養寺）。文献『北条文書』『歴代召案』
セ			○	○			６ヶ所の環濠遺構。
ソ			○				14 ヶ所の環濠遺構。
タ			○			２重の堀	

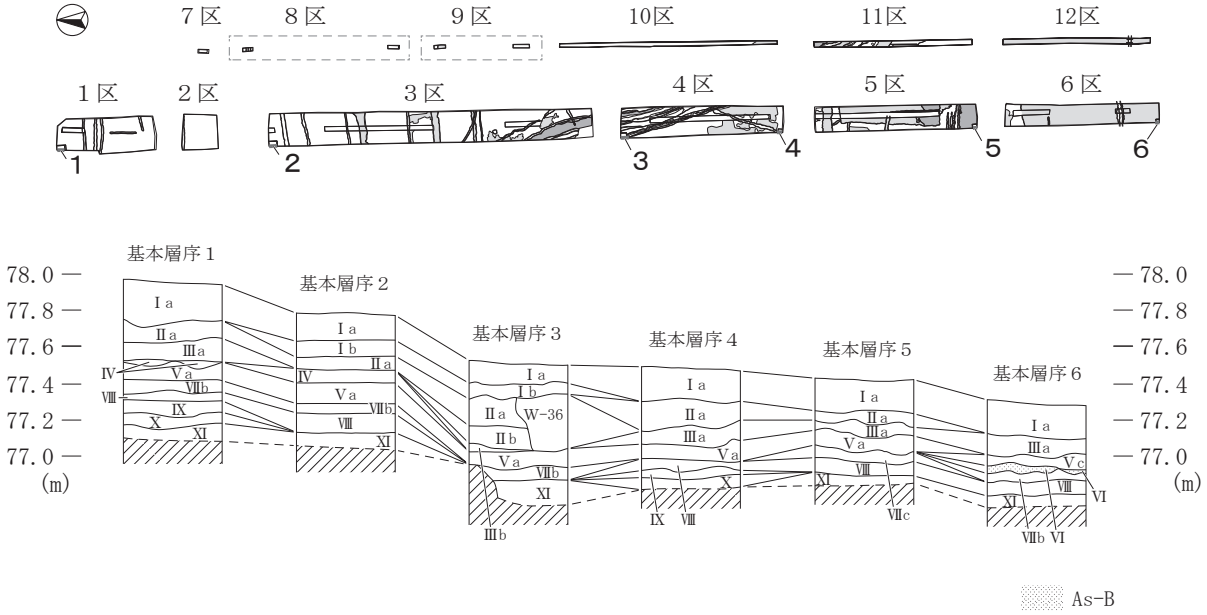
されている。また、上野国郡村誌の東善養寺の記事によると、長寛２（1164）年に“善要治村”から東善養村、西善養村に変わったとある。本遺跡北方には、嘉応元（1169）年創建と伝えられている天台宗の寺院「禅養寺」（あ）が立地する。

As-B 降下後の地域復興の拠点として考えられる環濠遺構（群馬県史 1990）が、前橋市の南部から伊勢崎市の南西部や玉村町一帯の利根川変流地帯と、伊勢崎市北部の湿地帯の微高地上に多く占地する。これらは方形を基調とする濠（堀）をめぐらした屋敷跡が主流で、特に山王・上佐鳥・藤川付近では網状に掘削した堀の間に屋敷が造られている（山崎 1988）。中世の屋敷跡として、本遺跡近傍に立地する中内村前遺跡３区屋敷（12～15 世紀）は、溝で囲まれた単郭方形で、中央に主屋建物と周囲にその付属建物を配した屋敷跡が検出されている。また、屋敷跡周辺の低地では水田跡が確認され、微高地は畠地として耕されていたと考えられている（石守 2004）。こういった環濠集落から城郭へ発展した事例として、力丸城（ア）や金尾城がある（山崎 1988）。

Ⅳ　基本層序

調査区１～６区の北西と南東隅に６ヶ所グリッドを設け、土層堆積状況の観察を行なった。

Ⅰ層は黒褐色砂質土の表土で、Ⅱ層は褐灰色砂質土の耕作土である。Ⅲ層はにぶい黄褐色砂質土、Ⅳ層は黒褐色の砂質土である。Ⅴ層は暗褐色～黒褐色系の砂質土で、Ⅱ～Ⅴ層は As-B を含む堆積土である。Ⅵ層は浅間山の噴火（1108 年）で降下した As-B の一次堆積層で、この層は調査区南側の一部のみ（基本層序６）で確認された。それ以外の範囲では後世の耕作や攪拌などにより削平されて残存していなかった。調査区西側北部（１～３区）にはⅦａ層が堆積（約 10 ～ 15cm）していて、褐色の粘性土で所々掘り込みがあり東西に帯状に残存している（Fig.25）。Ⅶｂ層は黒褐色の粘質土で、平安時代末期の水田跡耕作土となる。Ⅷ層は褐灰色の粘質土で As-C を含む。Ⅸ・Ⅹ層は灰黄褐色の粘質土で、Ⅺ層は灰白色の粘質土である。



基本層序
Ⅰa. 黒褐色砂質土　(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。As-A 軽石粒少量。黄褐色土小ブロック微量。表土。
Ⅰb. 灰黄褐色土　(10YR5/2) しまりややあり、粘性なし。As-A 軽石粒少量。表土。
Ⅱa. 褐灰色砂質土　(10YR4/1) しまりあり、粘性やや弱い。As-B 粒少量。小礫微量。鉄分沈着弱い。表土。
Ⅱb. 褐灰色砂質土　(10YR4/1) しまりあり、粘性やや弱い。As-B 少量。鉄分沈着顕著。
Ⅱc. にぶい黄褐色土　(10YR5/3) しまりあり、粘性弱い。As-B・鉄分沈着弱い。
Ⅲa. にぶい黄褐色砂質土　(10YR4/3) しまりあり、粘性弱い。As-B 多量。鉄分沈着。
Ⅲb. 灰黄褐色土　(10YR4/3) しまりあり、粘性やや弱い。As-B 中量。
Ⅳ. 黒褐色砂質土　(10YR3/2) しまりあり、粘性弱い。As-B 多量。鉄分沈着。
Ⅴa. 黒褐色砂質土　(10YR4/1) しまりあり、粘性弱い。As-B 多量。鉄分沈着。
Ⅴb. 褐色砂質土　(10YR4/4) しまりあり、粘性やや弱い。As-B 中量。黄褐色土小ブロック少量。鉄分沈着。
Ⅴc. 灰黄褐色土　(10YR4/2) しまりやや弱い、粘性ややあり。As-B 中量。黄褐色土小ブロック少量。
Ⅴd. 暗褐色土　(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。黄褐色粘土小ブロック多量。As-B 中量。
Ⅵ. にぶい黄橙色土　(10YR6/3) しまり弱い、粘性なし。As-B 多量。一次堆積層。
Ⅶa. にぶい黄褐色土　(10YR4/3) しまり・粘性あり。As-C 含む。粘性土。
Ⅶb. 黒褐色粘質土　(10YR3/1) しまり強い、粘性あり。As-C 微量。鉄分沈着ややあり。確認面。水田耕作土。
Ⅶc. にぶい黄褐色土　(10YR5/4) しまりやや弱い、粘性あり。As-C・黄褐色土小ブロック少量。鉄分沈着。
Ⅷ. 褐灰色粘質土　(10YR4/1) しまり強い、粘性あり。As-C 少量。鉄分沈着ややあり。
Ⅸ. 灰黄褐色粘質土　(10YR4/2) しまりやや弱い、粘性あり。As-C 微量。鉄分沈着顕著。
Ⅹ. 灰黄褐色粘質土　(10YR4/2) しまりやや弱い、粘性あり。鉄分沈着ややあり。
Ⅺ. 灰白色粘質土　(10YR7/1) しまりやや弱い、粘性あり。鉄分沈着ややあり。

0　(断面)　1m
1:40

Fig.4　基本層序

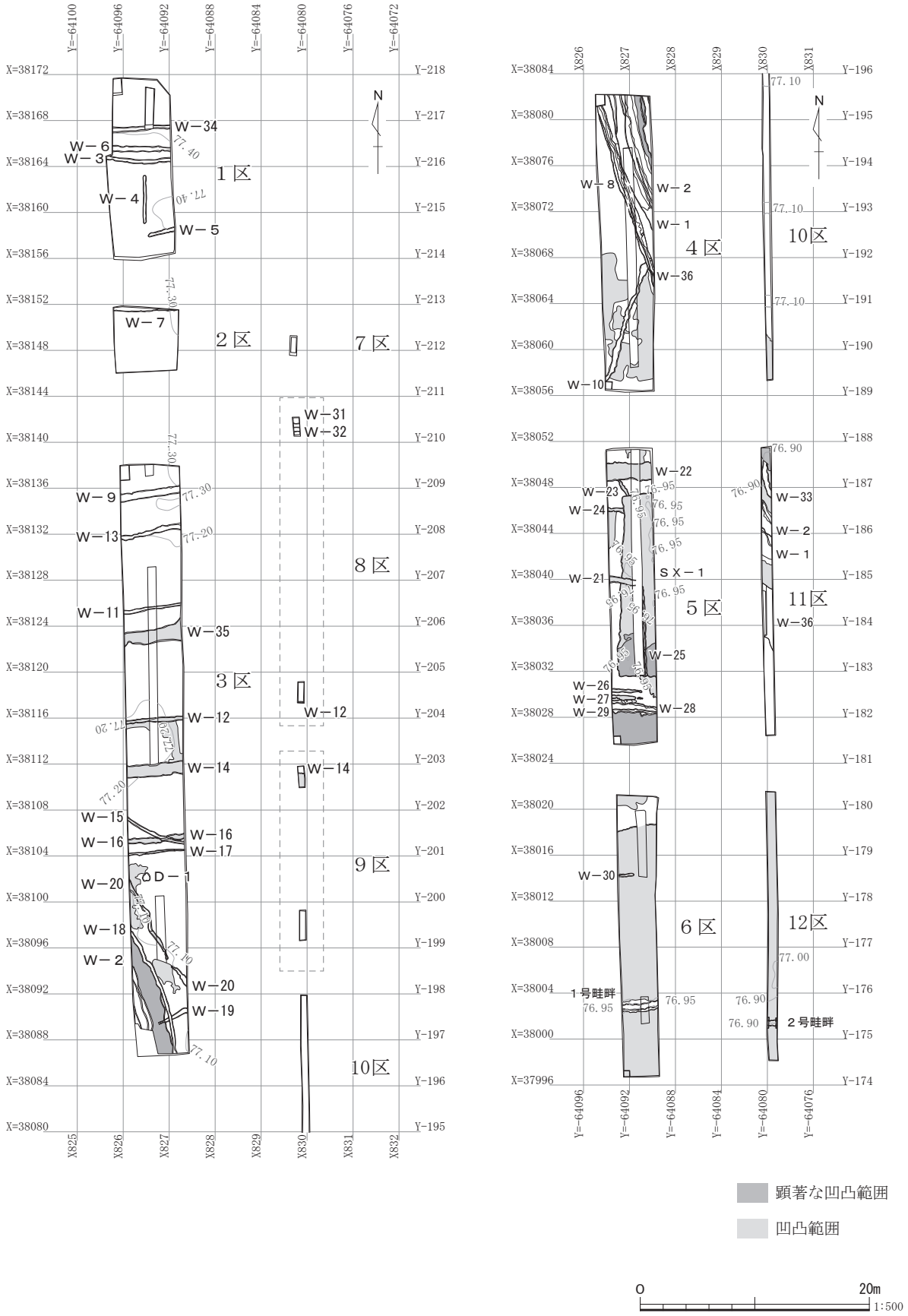

1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
11区
12区
W－34
W－6
W－3
W－4
W－5
W－7
W－31
W－32
W－9
W－13
W－11
W－35
W－12
W－14
W－15
W－16
W－17
W－20
DD－1
W－18
W－2
W－19
W－8
W－1
W－36
W－10
W－22
W－23
W－24
W－21
SX－1
W－25
W－26
W－27
W－29
W－28
W－33
W－30
1号畦畔
2号畦畔
顕著な凹凸範囲
凹凸範囲
0
20m
1:500

Fig.5　全体図

Ⅴ　遺構と遺物

１．概　要

今回の調査で平安時代末期の水田跡（畦畔２条）、中近世以降の溝跡（36 条）、土坑（１基）と不明遺構（１基）が検出された。As-B（1108 年）の一次堆積層は調査区の僅かな部分（６・12 区）でしか確認できず、大半の部分は後世の耕作により削平・攪拌されていた。溝跡はすべての覆土中に As-B が混入しており、比較的浅く細いものが多く、主に東西方向に走向している。５区で検出された不明遺構（ＳＸ－１）は区画内が掘り下げられている。

３・４・11 区に位置するＷ－１（近世）、Ｗ－２（中近世以降）、Ｗ－８（中近世以降）、Ｗ－ 19（中近世以降）、Ｗ－ 36（近現代）は北西－南東と走向がほぼ一致し、重複・平行している。それぞれの規模・形態は異なるものの、流水の痕跡として流砂の堆積が認められた。中近世から近現代まで踏襲されて使用されたものと思われる。

２．As-B 層下水田跡（Fig.6・7，PL.4，Tab.4）

位置：X826・827、Y-174 ～ -180（６区）。X829・830、Y-174 ～ -180（12 区）。**重複**：水田面には後世に掘り込まれた溝跡が１条（Ｗ－ 30）確認された。**立地**：調査区南部の６区と 12 区で検出された。６区での水田面の最高位は北側で 76.95 ｍ、最低位は南側で 76.91 ｍを測り、4 ㎝の高低差がある（区画１・２）、12 区では、最高位は北側で 76.95 ｍ、最低位は南側で 76.87 ｍを測り、8 ㎝の高低差がある。（区画３・４）**残存状態**：As-B の一次堆積層（基本土層Ⅵ層）が１～ 6㎝ほど堆積しており、残存状態は比較的良好であった。**区画**：検出された水田跡は４区画で、１・２号畦畔の軸が若干ずれているため、区画１・３と区画２・４が同一区画かは不明である。**畦畔**：東西方向に走行している。1 号畦畔の幅は約 30㎝で、２号畦畔は約 28㎝である。主軸方位はＮ－ 83°－Ｅ（１号畦畔）、Ｎ－ 89°－Ｗ（２号畦畔）を指す。畦畔の上面・両側には不整形の小窪みが多数存在した。取配水に係る遺構は確認されていない。**水田面の状態**：水田面は比較的平坦であり、全体的にやや凹凸がみられる。窪みの形状は円形・楕円形・不整形で深さは 10㎝を越えるものは少ない。耕作土は黒褐色粘質土（基本土層のⅦｂ層）である。牛馬や人間のような

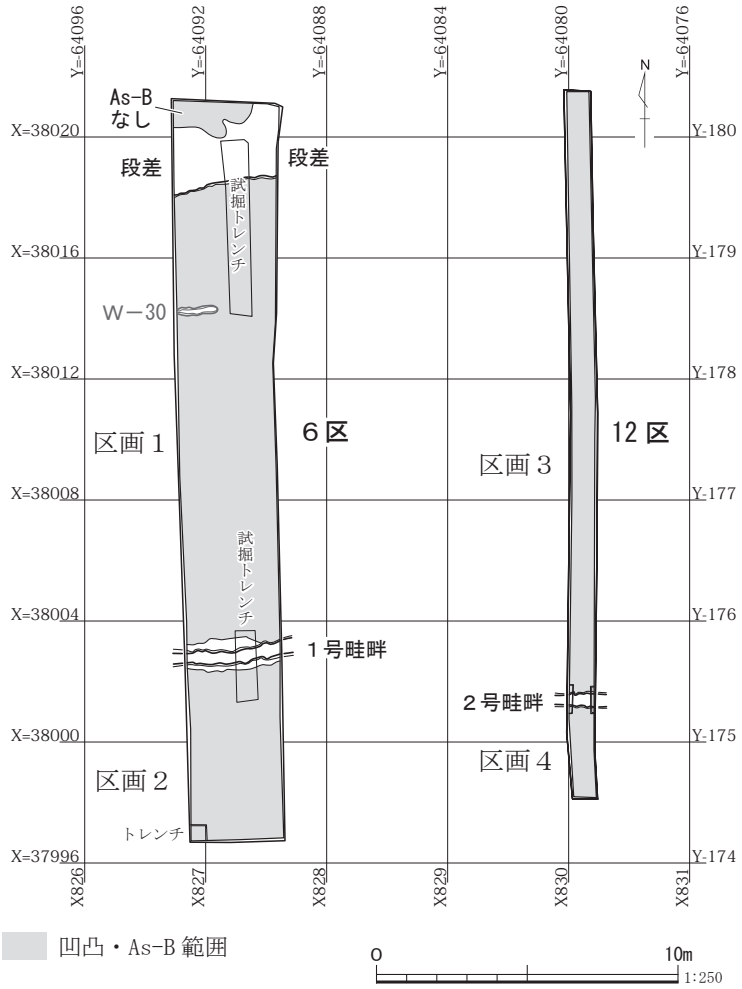


Fig.6　As-B 層下水田跡（１）

足跡は確認されなかった。**時期**：As-B の一次堆積層に被覆されていることから、平安時代末期のものと考えられる。**出土遺物**：確認されなかった。**備考**：区画１の北側から一段高くなる部分（4 ～ 5cm 程）が確認された。ここから土壌の色調が若干明るくなり、黄褐色ブロックを多く含む基本土層Ⅶc 層となっていた。また凹凸面が顕著になる様子が窺え、水田域との境界であったと想定される。

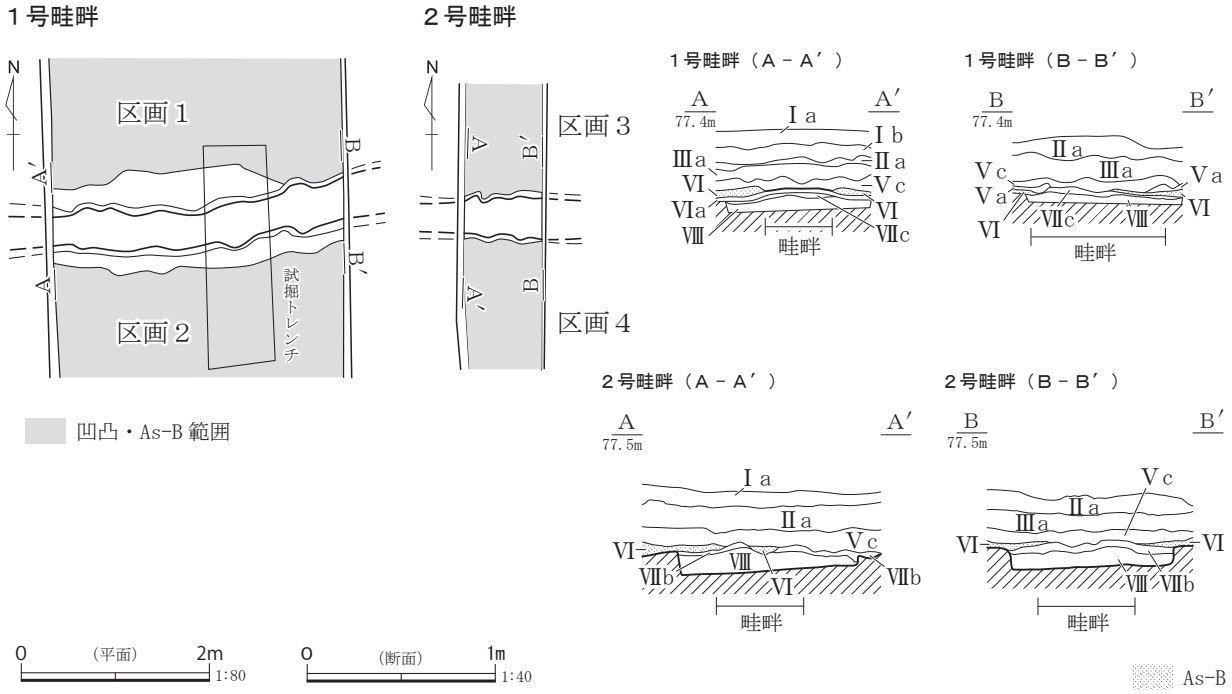


Fig.7　As-B 層下水田跡（２）

Tab.4　水田跡計測表

区画 No.	南北軸 (m)	東西軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	畦畔高 (cm)
1	17.72	(3.49)	76.949	0.7	4.7
2	(5.62)	(3.04)	76.926	4.3	6.7

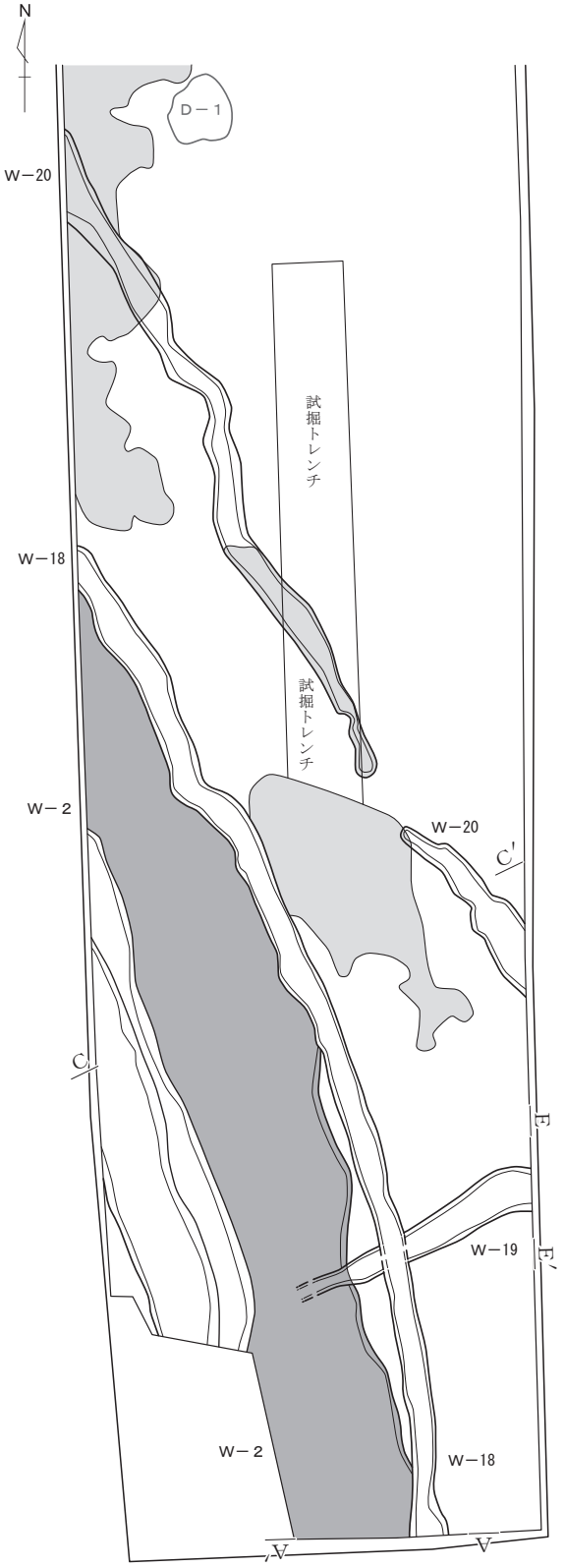
区画 No.	南北軸 (m)	東西軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	畦畔高 (cm)
3	(19.81)	(0.8)	76.925	8.2	4.3
4	(3.04)	(0.84)	76.881	3.1	4.5

３．溝　跡

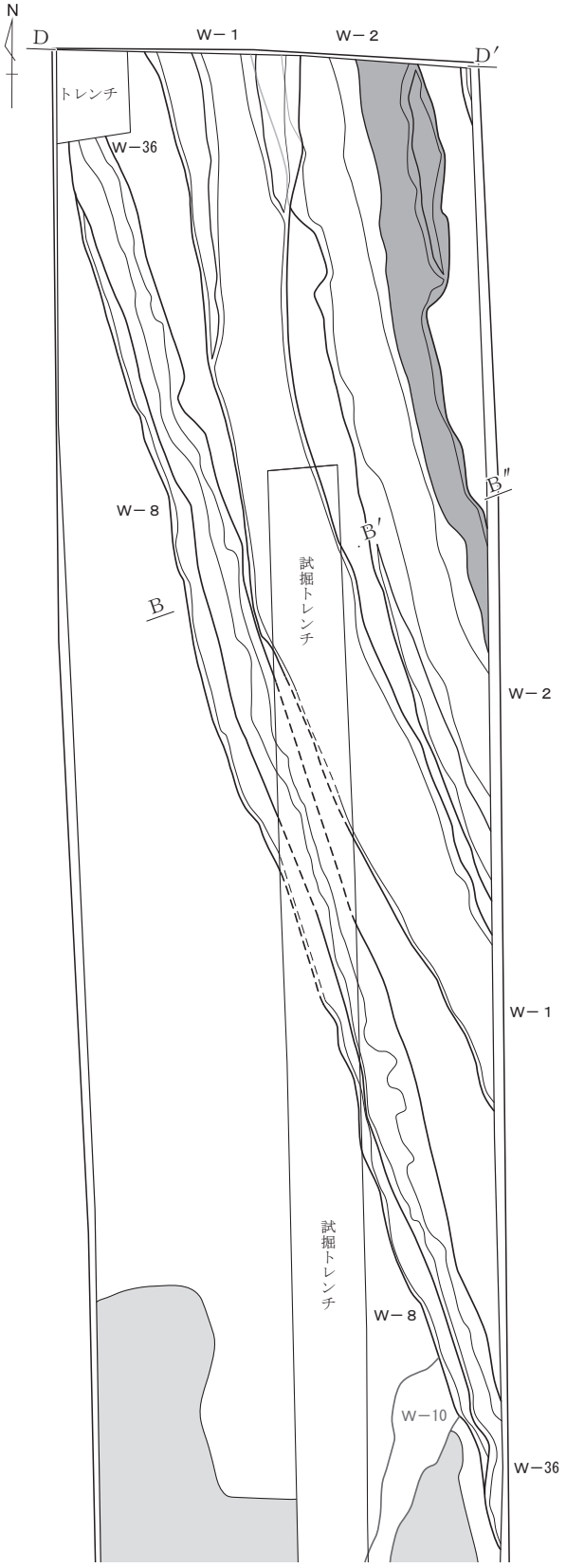
Ｗ－１号溝跡（Fig.8 ～ 10，PL.3 ～ 5）

位置：X826・827、Y-193 ～ -196（４区）。X829・830、Y-186・-187（11 区）。北西側、南東側は調査区外に延びる。**重複**：Ｗ－２、Ｗ－ 36 と重複し、新旧関係は新しい順にＷ－ 36 → Ｗ－１ → Ｗ－２である。**主軸方位**：Ｎ－ 16°－Ｗ。**規模**:（４区）全長［12.43］m、上端幅 0.84 ～ 1.58 m、下端幅 0.36 ～ 1.10 m、深さ 0.29 m。（11 区）全長［1.01］m、上端幅 2.45 ～ 2.61 m、下端幅 1.92 ～ 2.33 m、深さ 0.30 m。**形態**:北西～南東方向に走向する。断面は逆台形状を呈する。**底面**：標高は４区北側が 76.84 m、４区南側が 76.80 m、11 区は 76.70m で南に傾斜している。**覆土**：上層は黄褐色土を主体とし、下層で As-B を多く含む層と流砂の堆積が認められたため、流水が考えられる。**遺物**：陶磁器・土師器の小片と木杭・磨耗した礫が出土した。**時期**：出土遺物から近世以降に埋没したものと思われる。**備考**:11 区Ｗ－１の底面から４本の木杭が台形状に打ち込まれた状態で検出され(Fig. 9・PL.5)、すぐ脇から４面が摩耗した礫と陶磁器片（18 世紀代）が出土した。保存状況の良好な木杭は丸木杭で残

３区 Ｗ－２・18～20号溝跡



４区 Ｗ－１・２・８・36号溝跡



顕著な凹凸範囲

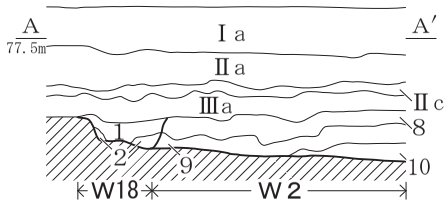
凹凸範囲

0 (平面) 2m 1:80

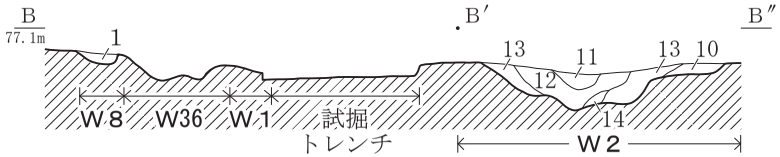
0 (平面) 2m 1:80

Fig.8　溝跡（１）

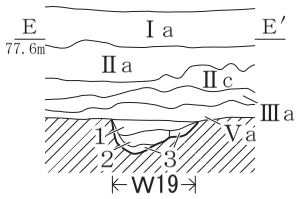
3区 W－2・18号溝跡（A－A′）



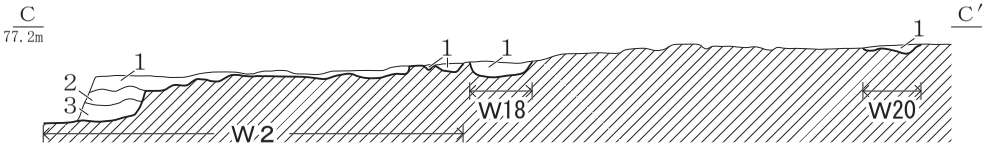
4区 W－1・2・8・36号溝跡（B－B′－B″）



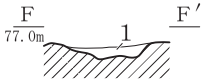
3区 W－19号溝跡（E－E′）



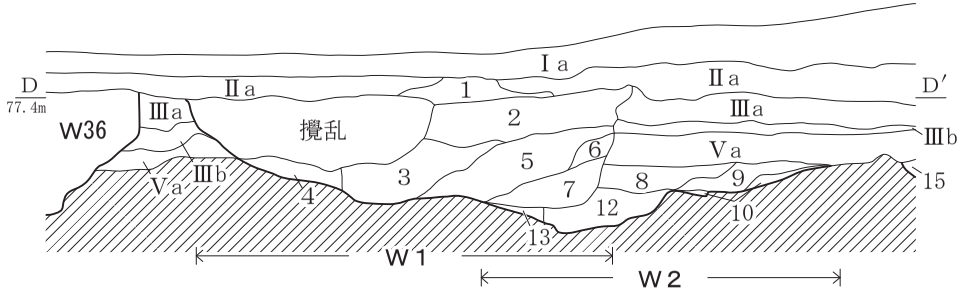
3区 W－2・18・20号溝跡（C－C′）



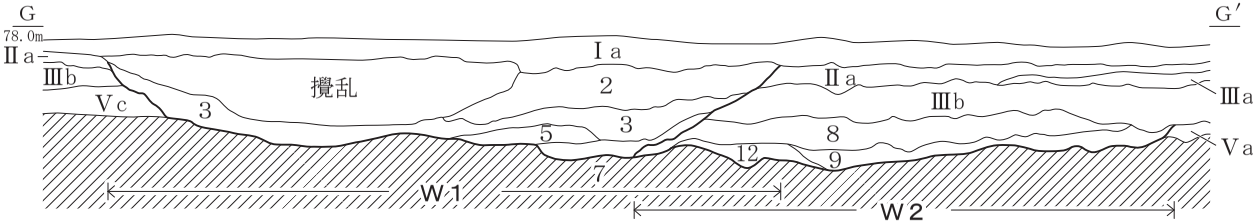
11区 W－33号溝跡（F－F′）



4区 W－1・2・36号溝跡（D－D′）



11区 W－1・2号溝跡（G－G′）



W－1・2（A－A′・B－B′－B″・D－D′・G－G′）
1．にぶい黄褐色土（10YR6/4）しまりあり、粘性なし。軽石少量。
　黄褐色土小ブロック微量。
2．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりややあり、粘性なし。
　黄・茶褐色土小ブロック少量。軽石微量。
3．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり・粘性ややあり。
　As-B・黄・茶褐色土小ブロック中量。
4．褐色土（10YR4/4）しまりやや弱い、粘性ややあり。As-B 多量。
　黄・茶褐色土小ブロック少量。
5．褐色土（10YR4/3）しまり・粘性ややあり。As-B 多量。
　茶褐色土小ブロック少量。
6．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり、粘性ややあり。As-B 少量。
7．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりややあり、粘性弱い。As-B 中量。
　茶褐色土小ブロック少量。
8．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり、粘性なし。As-B 多量。
　鉄分・茶褐色土小ブロック少量。
9．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性なし。As-B 中量。
　鉄分・茶褐色土小ブロック微量。
10．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性なし。As-B 多量。
11．黒褐色土（10YR3/1）しまりあり、粘性なし。As-B 多量。
12．黒褐色土（10YR4/2）しまりややあり、粘性あり。As-B 中量。
13．褐色土（10YR4/4）しまりやや弱い、粘性ややあり。As-B 少量。
14．黄褐色土（10YR5/6）しまりやや弱い、粘性ややあり。As-B 中量。
　黄褐色粘土小ブロック少量。
15．黒褐色土（10YR3/2）しまりやや弱い、粘性ややあり。As-B 微量。

W－2（C－C′）
1．にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりややあり、粘性弱い。
　As-B・黄褐色土小ブロック少量。
2．灰黄褐色土（10YR5/2）しまりやや弱い、粘性弱い。As-B 多量。
3．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりややあり、粘性弱い。As-B 中量。

W－8（B－B′－B″）
1．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性弱い。As-B 少量。
2．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性なし。As-B 多量。

W－18（A－A′・C－C′）
1．灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり、粘性弱い。As-B 中量。

W－19（E－E′）
1．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性ややあり。As-B 中量。
　黄褐色土小ブロック微量。
2．灰黄褐色土（10YR4/2）しまり弱い、粘性なし。As-B 多量。
3．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり弱い、粘性なし。As-B 多量。
　鉄分沈着。

W－20（C－C′）
1．灰黄褐色土（10YR5/2）しまりあり、粘性弱い。
　As-B・灰黄褐色土小ブロック少量。

W－33（F－F′）
1．黒褐色土（10YR2/3）しまりややあり、粘性やや弱い。As-B 中量。
　黄褐色土小ブロック微量。

0　（断面）　1m
1:40

Fig.9　溝跡（2）

存長約28cm、径2.2cm程であり、先端部は尖らせるような加工が施してあった。用排水路と考えられる本遺構に伴う構造物ではあるものの、漁撈と関連した施設であった可能性もある。

W－２号溝跡（Fig.8～10，PL.3～5）

位置：X826・827、Y-197～-200（３区）。X826・827、Y-194～-196（４区）。X829･830、Y-186･-187（11区）。北西側、南東側の調査区外に延びる。**重複**：W－１、W－18、W－19と並走・重複し、新旧関係は新しい順にW－１→W－18→W－２→W－19と想定される。**主軸方位**：N－13°－W。**規模**：（３区）全長［9.70］m、上端幅2.02～2.19m、下端幅0.10～0.64m、深さ0.36m。（４区）全長［9.80］m、上端幅1.10～1.79m、下端幅0.40～0.62m、深さ0.28m。（11区）全長［1.81］m、上端幅2.40～2.91m、下端幅1.06～2.22m、深さ0.28m。**形態**：北西～南東方向に走向する。断面は弧状を呈し、東側上位に段差が認められ、緩やかに立ち上がる。**底面**：標高は北西側（３区）76.97m、中央付近（４区）76.66m、南東側（11区）76.63mで南に傾斜している。**覆土**：上層は灰黄色土を主体とし、下層では多量のAs-B混入土と流砂の堆積が認められ、流水の痕跡と思われる。**遺物**：須恵器・土師器片や小動物の骨片が出土した。**時期**：出土遺物、覆土と重複関係から中近世以降に埋没したと考えられる。**備考**：東側はなだらかな立ち上がりで、凹凸が顕著に認められる。

W－８号溝跡（Fig.8・9，PL.3・4）

位置：X826・827、Y-192～-196（４区）。北西側、南東側は調査区外に延びる。**重複**：W－10、W－36と重複し、新旧関係は新しい順にW－10→W－８→W－36と考えられる。**主軸方位**：N－18°－W。**規模**：全長［15.22］m、上端幅0.08～0.31m、下端幅0.04～0.27m、深さ0.16m。**形態**：北西･南東方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は北西側で76.94m、南東側で76.64mで南側に傾斜している。**覆土**：少量のAs-Bを含む黒褐色土である。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：W－１、W－２、W－36と並走している。覆土中には、流水の痕跡は認められなかった。

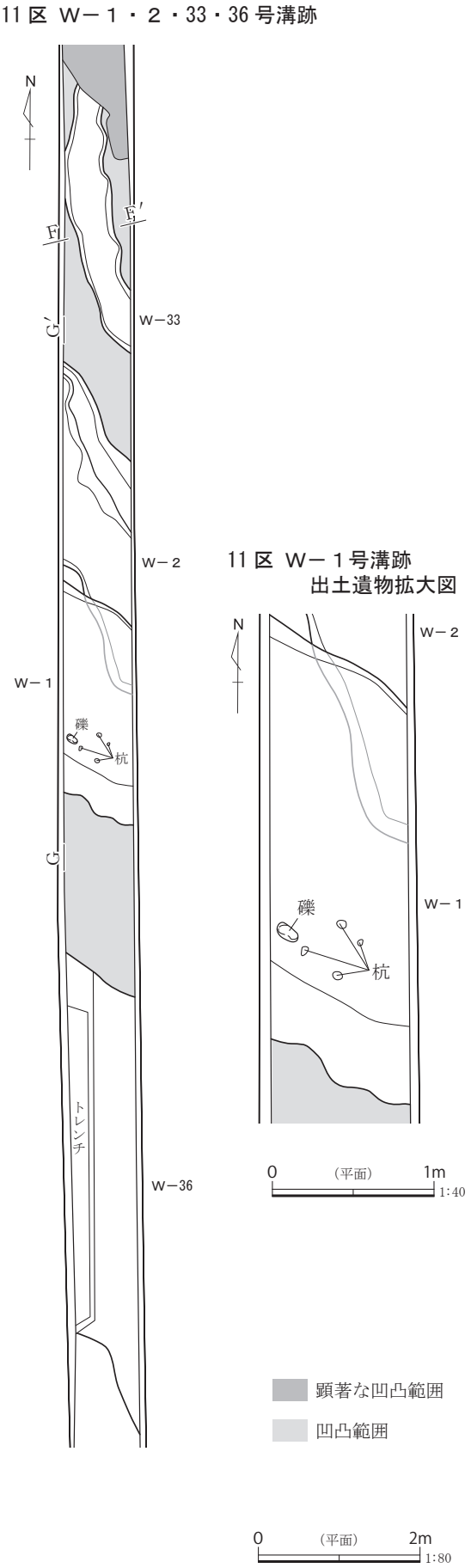


Fig.10　溝跡（３）

W－18 号溝跡（Fig.8・9，PL.3）

位置：X826・827、Y-197 ～ -200（３区）。北東側と南西側は調査区外に延びる。**重複**：W－２、W－ 19 と重複し、新旧関係は新しい順に、W－２ → W－ 18 → W－ 19 である。**主軸方位**：N－20°－W。**規模**：全長［11.37］m、上端幅 0.24 ～ 0.43 m、下端幅 0.12 ～ 0.43 m、深さ 0.18 m。**形態**：北西～南東方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は北西側では 76.97m、南東側では 76.94m で南に傾斜している。**覆土**：中量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：W－２と並走していて、機能については不明である。

W－19 号溝跡（Fig.8・9，PL.3）

位置：X826・827、Y-198（３区）。東側は調査区外に延びる。**重複**：W－２、W－ 18 と重複し、新旧関係は新しい順に、W－２ → W－ 18 → W－ 19 である。**主軸方位**：N－65°－E。**規模**：全長［2.82］m、上端幅 0.16 ～ 0.48 m、下端幅 0.09 ～ 0.48 m、深さ 0.17 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側は 76.91m、東側では 76.90m で東に傾斜している。**覆土**：中量の As-B を含む黒褐色土で、底面に若干の流砂を確認した。流水の可能性も考えられる。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明である。

W－20 号溝跡（Fig.8・9，PL.3）

位置：X826・827、Y-199 ～ -201（３区）。北東側、南西側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－27°－E（３区）。**規模**：（３区）全長［7.70］m、上端幅 0.08 ～ 0.42 m、下端幅 0.03 ～ 0.30 m、深さ 0.12 m。（３区）全長［2.25］m、上端幅 0.15 ～ 0.49 m、下端幅 0.06 ～ 0.40 m、深さ 0.08 m。**形態**：北西～南東方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は北西側では 77.01m、南東側では 77.04m で北に傾いている。**覆土**：少量の As-B を含む灰黄褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと思われ、W－18、W－ 19 よりは新しいと考えられる。**備考**：機能については不明である。

W－33 号溝跡（Fig.9・10，PL.5）

位置：X829・830、Y-187・-188（11 区）。東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－10°－W。**規模**：全長［3.38］m、上端幅 0.35 ～ 0.58 m、下端幅 0.26 ～ 0.47 m、深さ 0.08 m。**形態**：南北方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側では 76.87m、東側では 76.84m で南に傾いている。**覆土**：As-B 混入土を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明である。

W－36 号溝跡（Fig.8 ～ 10，PL.3 ～ 5）

位置：X826・827、Y-192 ～ 196（４区）。X829・830、Y-184・-185（11 区）。北西側と南東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－10°－W。**規模**：（４区）全長［17.20］m。（11 区）全長［0.44］m。**形態**：北西から南東方向に走向する。断面は緩いＶ字状を呈する。**遺物**：一部だけ掘削を行なったところ、上層からプラスチック製の袋、下層からはガラス製の薬瓶や石けり、レンガ片などが出土した。**時期**：出土遺物から近現代のものと考えられる。**備考**：W－１、W－２、W－８、W－ 18、W－ 20 と並走している。

Ｗ－３号溝跡（Fig. 11，PL. 3）

位置：X825 ～ 827、Y-217（１区）。西側・東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：W－87°－W。**規模**：全長［5.58］m、上端幅［0.25 ～ 0.40］m、下端幅［0.14 ～ 0.30］m、深さ 0.08 m。**形態**：東西方向へ走向し、断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.27 mであった。**覆土**：多量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと思われ、Ｗ－６より古く、Ｗ－ 34 よりは新しいと考えられる。**備考**：機能については不明である。

Ｗ－６号溝跡（Fig. 11，PL. 3）

位置：X825 ～ 827、Y-217（１区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－89°－W。**規模**：全長［5.04］m、上端幅 0.28 ～ 0.56 m、下端幅 0.20 ～ 0.43 m、深さ 0.08 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は 77.31m で平坦であった。**覆土**：中量の As-B が混入する黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降に埋没したものと思われ、Ｗ－３、Ｗ－４、Ｗ－５よりは新しいと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－ 34 号溝跡（Fig. 11，PL. 3）

位置:X825 ～ 827、Y-217（１区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**:N－87°－E。**規模**:全長［4.99］m、上端幅 0.28 ～ 0.55 m、下端幅 0.15 ～ 0.31 m、深さ 0.07 m。**形態**:東西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は 77.38m で平坦であった。**覆土**：As-B 混入土を覆土とする。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられ、W―３、W―６よりは新しいと思われる。**備考**：耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－３・６・34 号溝跡

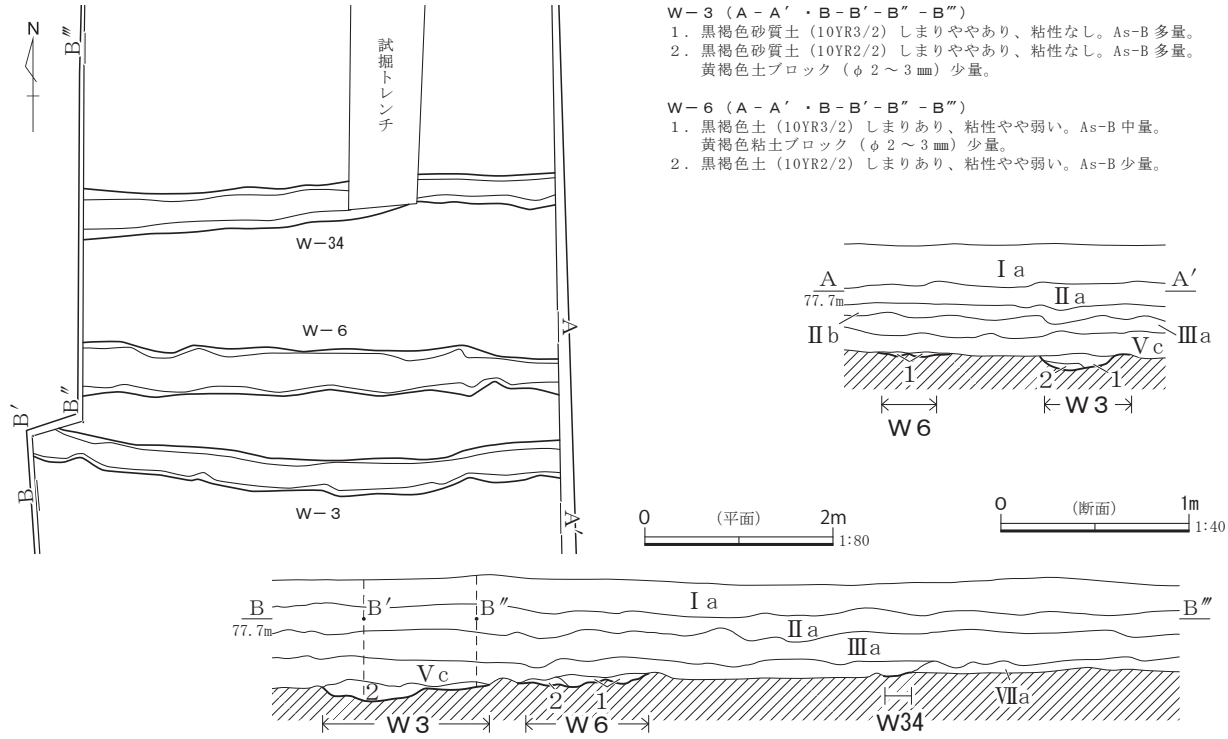


Fig. 11　溝跡（４）

Ｗ－４号溝跡（Fig.12，PL.3）

位置：X826、Y-215・-216（１区）。**主軸方位**：N－0°。**規模**：全長 4.19 m、上端幅 0.22 ～ 0.29 m、下端幅 0.15 ～ 0.23 m、深さ 0.07 m。**形態**：南北方向へ走向し、断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は北側で 77.31 m、南側で 77.34 mである。**覆土**：中量の As-B が混入する黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降に埋没したものと思われ、Ｗ－５と同時期、Ｗ－３よりは新しく、Ｗ－６よりは古いと考えられる。**備考**：耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－５号溝跡（Fig.12，PL.3）

位置：X826・827、Y-215（１区）。東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－75°―E。**規模**：全長［2.44］m、上端幅 0.30 ～ 0.43 m、下端幅 0.19 ～ 0.29 m、深さ 0.10 m。**形態**:東西方向へ走向し、断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.32 mで、東側は 77.35m で西側に傾斜が認められる。**覆土**：中量の As-B が混入する黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降に埋没したものと思われ、Ｗ－４とは同時期、Ｗ－３よりは新しく、Ｗ－６よりは古いと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－７号溝跡（Fig.12，PL.3）

位置：X825 ～ 827、Y-213（２区）。北側・西側・東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－89°―E。**規模**：全長［5.49］m、上端幅 0.07 ～ 0.41 m、下端幅 0.05 ～ 0.36 m、深さ 0.11 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は 77.31m で平坦である。**覆土**：中量の As-B が混入する黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと想定される。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

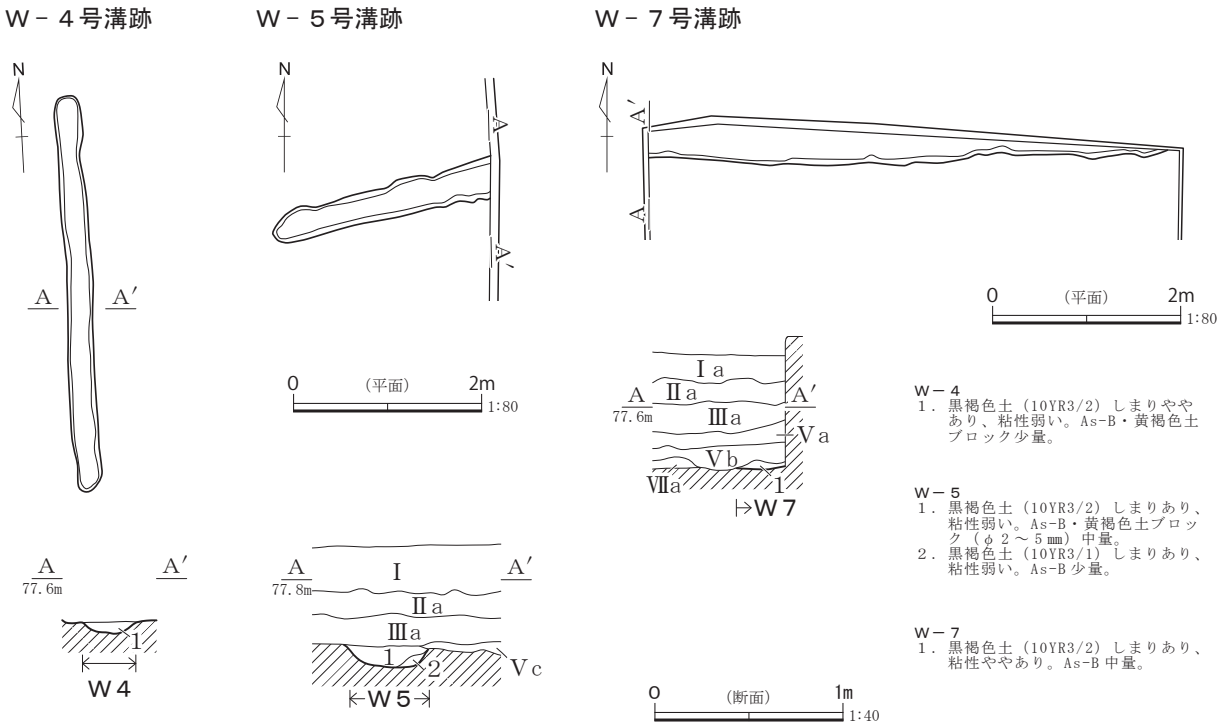


Fig.12　溝跡（５）

Ｗ－９号溝跡（Fig.13，PL.3）

位置：X825 ～ 827、Y-209・-210（３区）。西側、東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－18°－W。**規模**：全長［15.29］m、上端幅 0.55 ～ 0.75 m、下端幅 0.46 ～ 0.64 m、深さ 0.12 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は逆台形状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.19m、南東側で 77.21m で西側に傾斜している。**覆土**：少量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められない。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと想定され、W－ 13 より古く、W－ 11 より古いと思われる。**備考**：機能についての詳細は不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－ 13 号溝跡（Fig.13，PL.3）

位置：X825 ～ 827、Y-208・-209（３区）。西側・東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－ 80°－E。**規模**：全長［5.32］m、上端幅 0.27 ～ 0.62 m、下端幅 0.17 ～ 0.49 m、深さ 0.11 m。**形態**：東西方向に走向する。**底面**：標高は西側は 77.17m、東側では 77.18m で西に傾斜している。**覆土**：中量の As-B を含む灰黄褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土から中近世以降のものと想定され、W－ 9 よりは新しいと思われる。**備考**：機能については不明であり、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－９・13 号溝跡

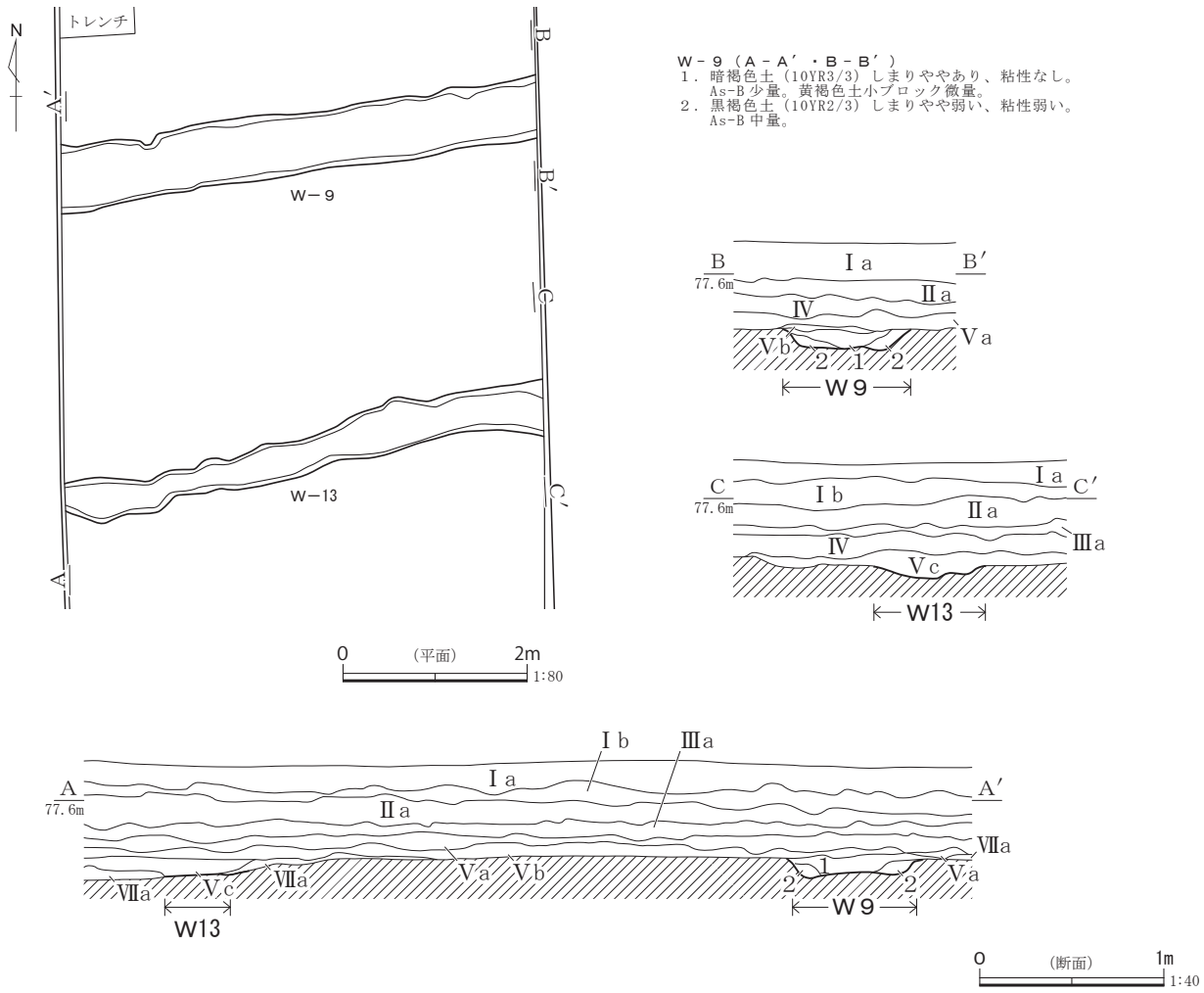


Fig.13　溝跡（６）

Ｗ－10 号溝跡（Fig.14，PL.3）

位置：X826・827、Y-190 ～ -192（４区）。北東側、南西側は調査区外に延びる。**重複**：Ｗ－８と重複し、本遺構の方が古い。**主軸方位**：Ｎ－20°―E。**規模**：全長［10.99］m、上端幅 0.20 ～ 0.75 m、下端幅 0.10 ～ 0.63 m、深さ 0.13 m。**形態**：北東～南西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は北東側で 76.90m、南東側で 76.95m で北に傾斜している。**覆土**：少量の As-B を含む黒褐色土である。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと想定される。**備考**：機能については不明である。

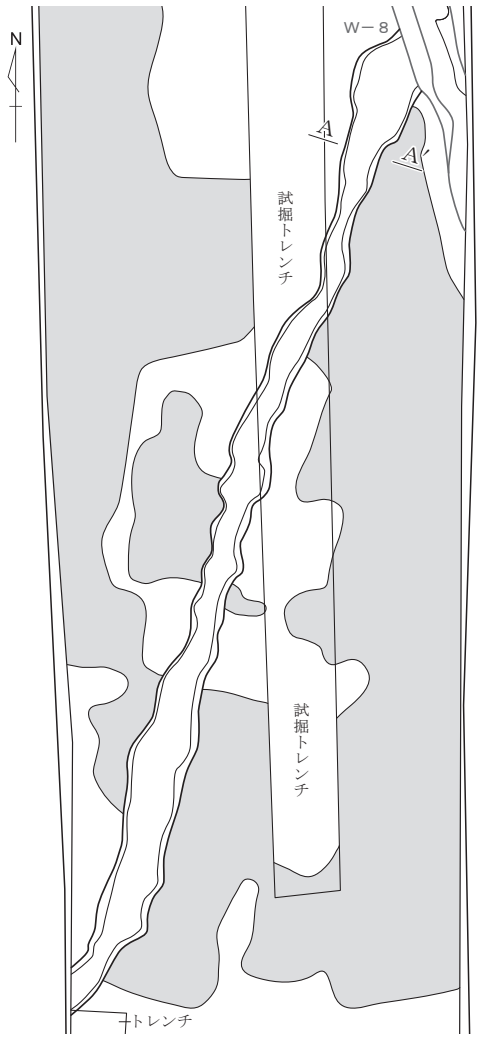
Ｗ－11 号溝跡（Fig.14・15，PL.3）

位置:X826･827､Y-207（３区）。西側､東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：Ｎ－81°―E。**規模**：全長［5.03］m、上端幅 0.20 ～ 0.37 m、下端幅 0.12 ～ 0.29 m、深さ 0.06 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は 76.13m で平坦である。**覆土**:少量の As-B 混入土を含む灰黄褐色土である。**時期**：覆土の状況から近世以降のものと思われ、Ｗ－９、Ｗ－12 より新しいと考えられる。**備考**：機能についての詳細は不明であり、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

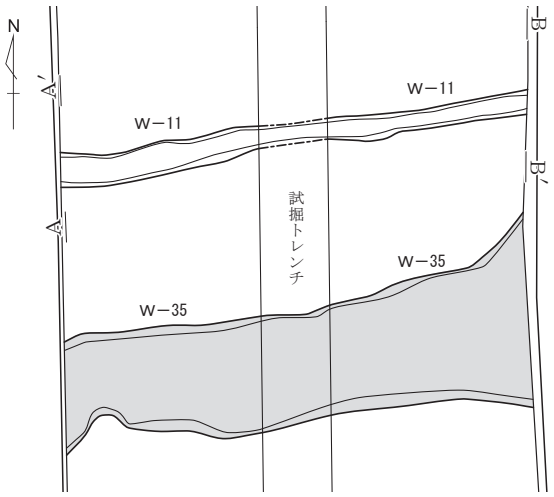
Ｗ－35 号溝跡（Fig.14，PL.3）

位置：X826・827、Y-206・207（３区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：Ｎ－80°―E。**規模**：全長［5.15］m、上端幅 0.89 ～ 1.87 m、下端幅 0.71 ～ 1.74 m、深さ 0.11 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は逆台形状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.17m､東側で 77.12m で東に傾斜している。**覆土**:As-B 混入土を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明である。

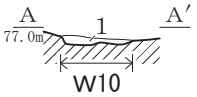
Ｗ-10 号溝跡



Ｗ-11・35 号溝跡



凹凸範囲



Ｗ－10
1．黒褐色土（10YR3/2）しまりあり、粘性弱い。
As-B・黄褐色小ブロック少量。

0 （平面） 2m 1:80

0 （断面） 1m 1:40

Fig.14　溝跡（７）

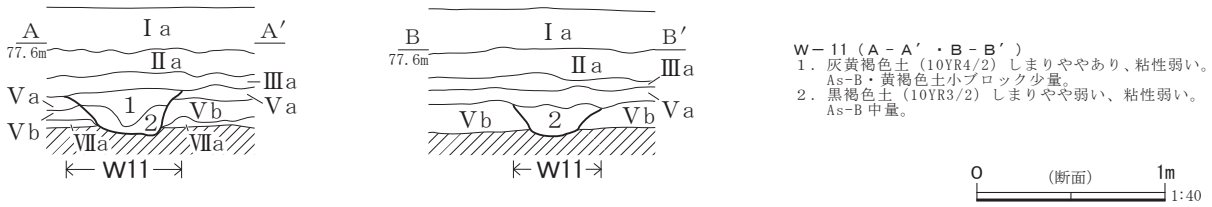


Fig.15　溝跡（８）

W－12 号溝跡（Fig.16, PL.3）

位置：X826・827、Y-204・-205（３区）。X829、Y-205（８区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－85°－W（３区）。N－88°－W（８区）。**規模**：（３区）全長［4.94］m、上端幅 0.25 ～ 0.45 m、下端幅 0.16 ～ 0.32 m、深さ 0.15 m。（８区）全長［0.46］m、上端幅 0.09 ～ 0.12 m、下端幅 0.04 ～ 0.08 m、深さ 0.08 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は３区西側では 77.16m、東側では 77.21m、８区では 77.21m で西に傾いている。**覆土**：多量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から近世以降のものと考えられ、W－11 よりは古いと思われる。**備考**：機能については不明であり、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

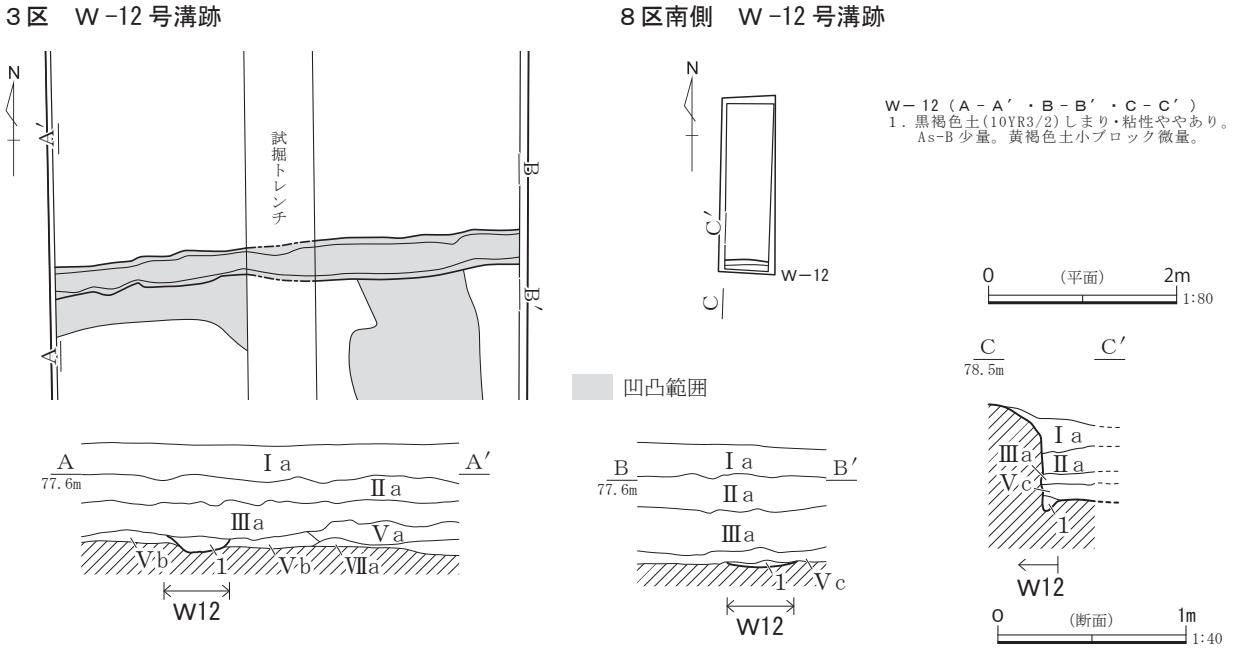


Fig.16　溝跡（９）

W－14 号溝跡（Fig.17, PL.3）

位置：X826・827、Y-203・-204（３区）。X829、Y-203（９区）。西側、東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－86°－E（３区）。N－89°－E（９区）。**規模**：（３区）全長［4.89］m、上端幅 0.92～1.22 m、下端幅 0.79～1.06 m、深さ 0.16 m。（９区）全長［0.52］m、上端幅 0.58 ～ 0.67 m、下端幅 0.52 ～ 0.61 m、深さ 0.18 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は 77.12m で平坦である。**覆土**：中量の As-B を含む灰黄褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられ、W－12 よりは古いと思われる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

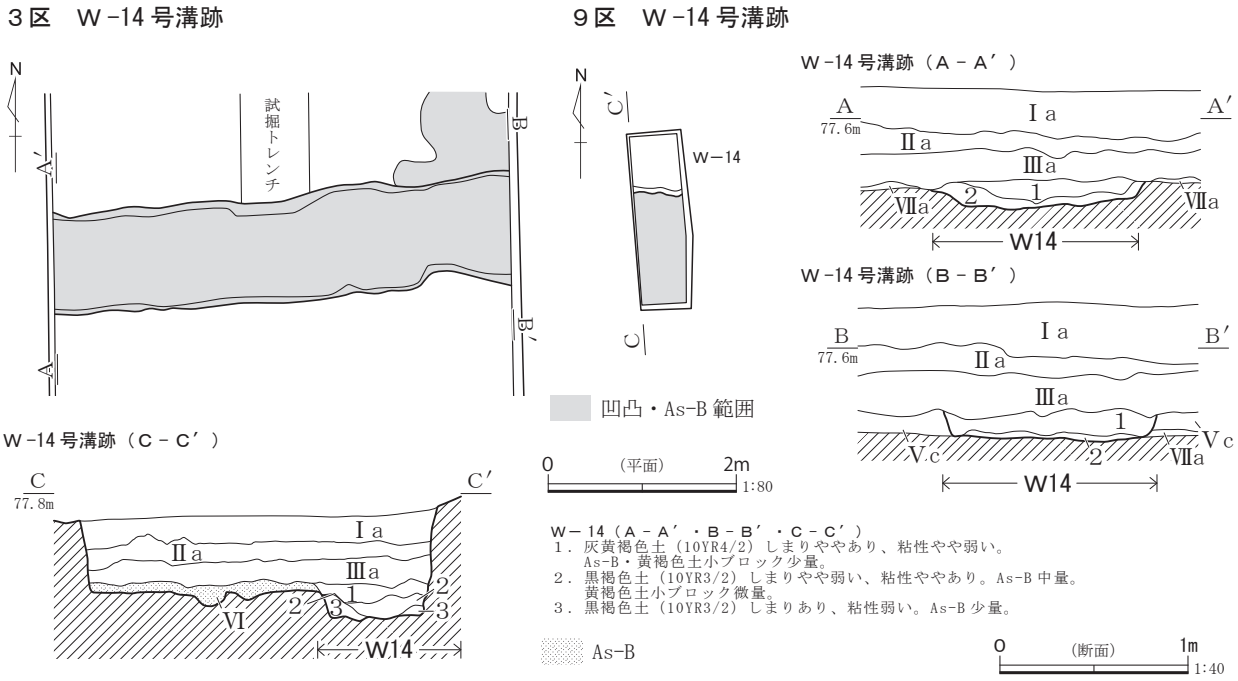


Fig. 17　溝跡（10）

Ｗ－ 15 号溝跡（Fig. 18・19, PL. 3・4）

位置：X826・827、Y-202（３区）。北西側、南東側は調査区外に延びる。**重複**：Ｗ－ 16 と重複し、本遺構の方が古い。**主軸方位**：N－67°－W。**規模**：全長［5.48］m、上端幅 0.11 ～ 0.52 m、下端幅 0.13 ～ 0.34 m、深さ 0.12 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.04m、南東側で 77.07m で東側に傾斜している。**覆土**：中量の As-B を含む灰黄褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられ、Ｗ－ 17 よりは古いと思われる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－ 16 号溝跡（Fig. 18・19, PL. 3・4）

位置：X826・827、Y-202（３区）。西側、東側は調査区外に延びる。**重複**：Ｗ－ 15 と重複し、本遺構の方が新しい。**主軸方位**：N－84°－E。**規模**：全長［4.86］m、上端幅 0.33 ～ 0.55 m、下端幅 0.18 ～ 0.45 m、深さ 0.12 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は北東側で 77.04m、南東側で 77.03m で東に傾斜している。**覆土**：少量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられ、Ｗ－ 17 よりは古いと思われる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－ 17 号溝跡（Fig. 18・19, PL. 3・4）

位置：X826・827、Y-202（３区）。西側、東側は調査区外

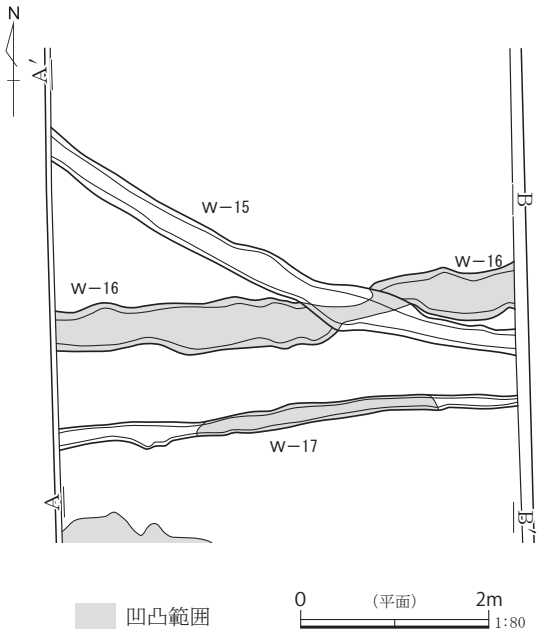


Fig. 18　溝跡（11）

に延びる。**主軸方位**：N－85°―E。**規模**：全長［4.87］m、上端幅 0.11 ～ 0.29 m、下端幅 0.04 ～ 0.23 m、深さ 0.18 m。**形態**:東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**:標高は東側で 77.04m、南東側で 77.03m で、東に傾斜している。**覆土**：少量の As-B を含む黒褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

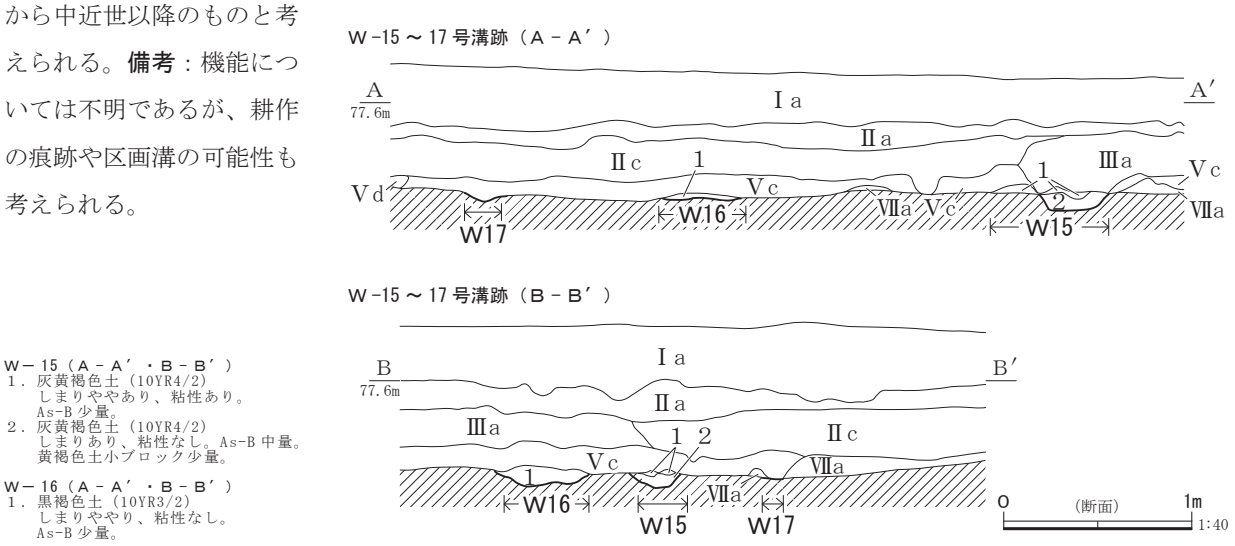


Fig.19　溝跡（12）

W－21 号溝跡（Fig.20，PL.4）

位置:X826･827、Y-185･-186（５区）。西側は調査区外に延びる。**重複**:ＳＸ－１と重複し、本遺構の方が新しい。**主軸方位**:N－83°―W。**規模**:全長［2.29］m、上端幅 0.47 ～ 0.63 m、下端幅 0.38 ～ 0.50 m、深さ 0.13 m。**形態**:東西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**:標高は西側で 76.97m、東側で 76.95m で東側に傾斜している。**覆土**：微量の As-B を含む灰黄褐色土で、流水の痕跡は認められなかった。**時期**：覆土の状況から近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－22 号溝跡（Fig.20，PL.4）

位置：X826・827、Y-188（5 区）。西側、東側は調査区外に延びる。**重複**：W－ 23 と重複し、本遺構の方が新しい。**主軸方位**：N－89°―E。**規模**：全長［3.88］m、上端幅 1.29 ～ 1.66 m、下端幅 1.17 ～ 1.55 m、深さ 0.12 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は逆台形状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.00m、東側で 76.96m で東に傾斜している。**覆土**:As-B 混入土を含む覆土で埋没する。**時期**:覆土の状況から中近世以降のものと想定される。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－23 号溝跡（Fig.20，PL.4）

位置：X826・827、Y-187・-188（５区）。**重複**：W－ 22、ＳＸ－１と重複し、新旧関係は新しい順にＳＸ－１→ W－ 22 → W－ 23 と思われる。**主軸方位**：N－33°―W。**規模**：全長［0.40］m、上端幅 0.16 ～ 0.39 m、下端幅 0.09 ～ 0.27 m、深さ 0.14 m。**形態**：北東～南西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は 77.00m で平坦である。**覆土**：As-B 混入土を含む覆土である。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと想定される。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－24 号溝跡（Fig.20，PL.4）

位置:X826、Y-187（５区）。西側は調査区外に延びる。**重複**:ＳＸ－１と重複し、本遺構の方が古い。**主軸方位**:

N－88°－W。**規模**：全長［1.43］m、上端幅 0.26 ～ 0.47 m、下端幅 0.17 ～ 0.42 m、深さ 0.06 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側では 77.01m、東側では 77.00m で東に傾いている。**覆土**：As-B 混入土を含む覆土である。**時期**：覆土の状況から中近世以降に埋没したと想定される。**備考**：機能については不明である。

W－25 号溝跡（Fig.20・24，PL.4）

位置:X827、Y-183 ～ -185（５区）。**重複**:ＳＸ－１と重複し、ほぼ同時期のものと思われる。**主軸方位**:N－3°－W。**規模**:全長［7.84］m、上端幅 0.13 ～ 0.24 m、下端幅 0.09 ～ 0.16 m、深さ 0.06 m。**形態**:南北方向に走向する。**底面**：標高は北側は 76.91m、南側では 76.97m で北に傾斜している。**覆土**：As-B を含む覆土である。**時期**：覆土の状況から中近世以降のもの考えられる。**備考**：機能については不明である。

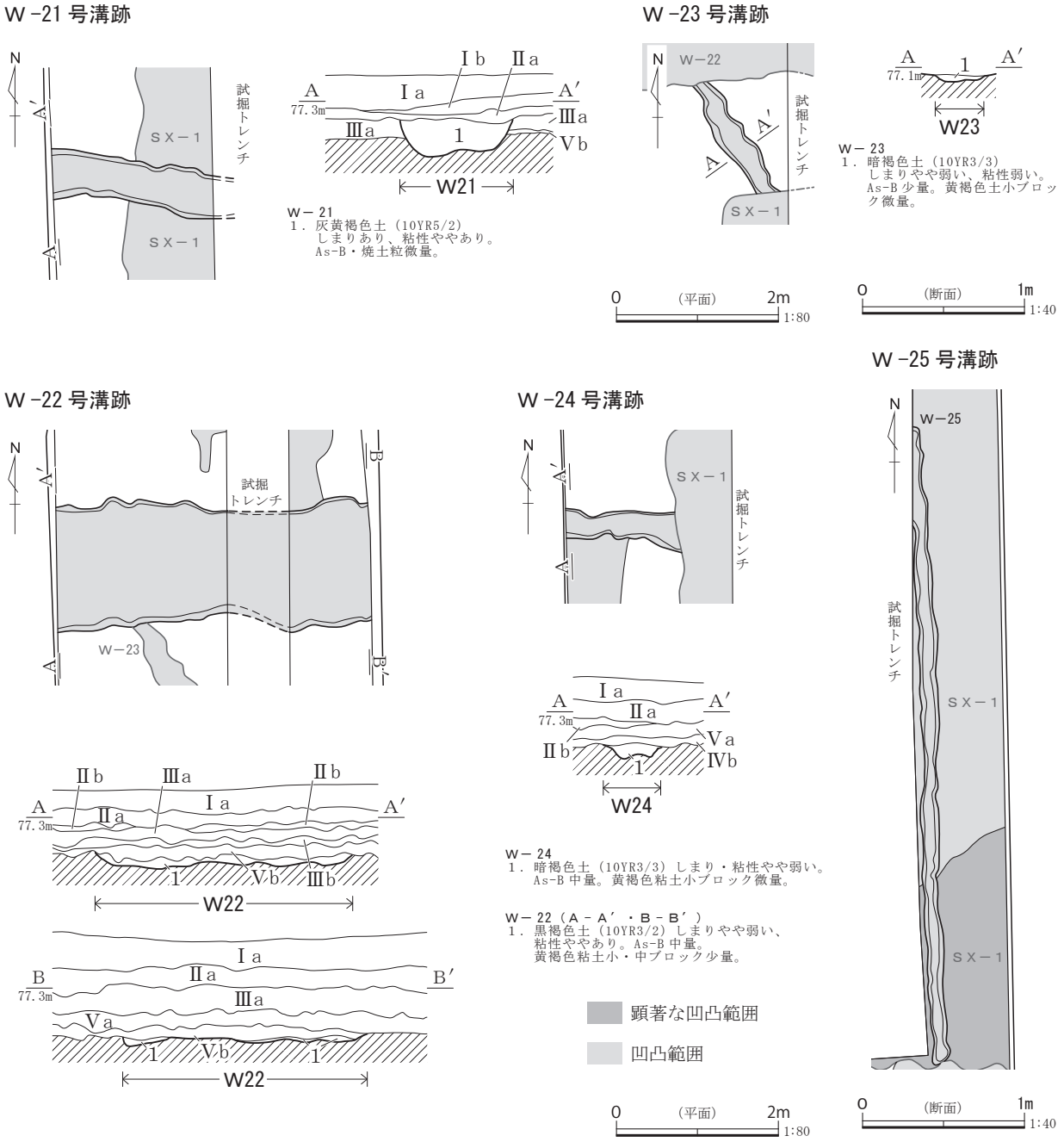


Fig.20　溝跡（13）

W－26 号溝跡（Fig.21，PL.4）

位置:X826･827､Y-183(５区)。西側は調査区外に延びる。**主軸方位**:N－89°―E。**規模**:全長［2.60］m､上端幅 0.11 ～ 0.36 m、下端幅 0.04 ～ 0.27 m、深さ 0.08 m。**形態**：東西方向に走向し、断面は浅い弧状を呈する。**底面**：標高は西側で 77.96m、東側では 77.97m で西に傾いている。**覆土**：As-B を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－27 号溝跡（Fig.21，PL.4）

位置：X826・827、Y-183（５区)。西側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－89°―W。**規模**：全長［2.07］m、上端幅 0.22 ～ 0.54 m､下端幅 0.12 ～ 0.39 m､深さ 0.08 m。及び全長 0.48 m､上端幅 0.10 ～ 0.18 m､下端幅 0.03 ～ 0.09 m、深さ 0.03 m。**形態**：東西方向に走向し、断面は弧状を呈する。**底面**：標高は西側で 76.95m、東側で 76.97m で東側に傾斜している。**覆土**：As-B を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－28 号溝跡（Fig.21，PL.4）

位置：X826・827、Y-183（５区)。西側は調査区外に延びる。**重複**：W－ 29 と重複しており、本遺構の方が新しい。**主軸方位**：N－86°―W。**規模**：全長［3.87］m、上端幅 0.36 ～ 0.61 m、下端幅 0.33 ～ 0.55 m、深さ 0.11 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は逆台形状を呈する。**底面**：標高は西側で 76.89m、東側で 76.91m で西に傾斜している。**覆土**:As-B を含む覆土で埋没する。**時期**:覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**:機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

W－29 号溝跡（Fig.21，PL.4）

位置:X826･827､Y-183（５区)。**重複**:W－ 28 と重複しており､本遺構の方が古い。**主軸方位**:N－87°―W。**規模**:全長［3.84］m、上端幅 0.19 ～ 0.64 m、下端幅 0.07 ～ 0.30 m、深さ 0.17 m。**形態**：東西方向に走向する。断面は弧状を呈する。**底面**：標高は、西側は 76.89m、東側は 76.91m で西に傾いている。**覆土**：As-B を含む覆土で

W -26 ～ 29 号溝跡

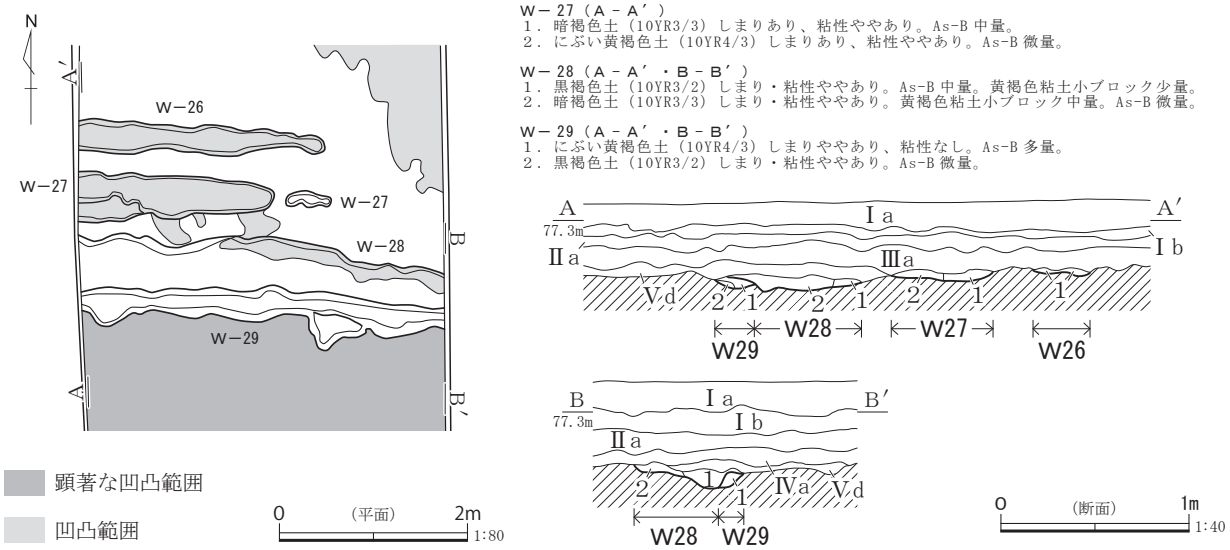


Fig.21　溝跡（14）

埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと想定される。**備考**：機能については不明であるが、耕作の痕跡や区画溝の可能性も考えられる。

Ｗ－ 30 号溝跡（Fig. 22）

位置：X826・827、Y-179（６区）。**主軸方位**：Ｎ－85°―E。**規模**:全長［1.36］m、上端幅 0.18 ～ 0.28 m、下端幅 0.05 ～ 0.17 m、深さ 0.17 m。**形態**：東西方向に走向し、断面は弧状を呈する。**底面**：標高は、西側は 76.94m、東側は 76.92m で東に傾斜している。**覆土**：As-B を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土からみて中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明である。

Ｗ－ 31 号溝跡（Fig. 22）

位置:X829、Y-211（８区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：Ｎ－89°―E。**規模**：全長［0.53］m、上端幅 0.51 ～ 0.54 m、下端幅 0.42 ～ 0.51 m、深さ 0.03 m。**形態**：東西方向に走向し、断面は浅い弧状を呈する。**覆土**：As-B を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土の状況から中近世以降に埋没したと考えられる。**備考**：機能については不明である。

Ｗ－ 32 号溝跡（Fig. 22）

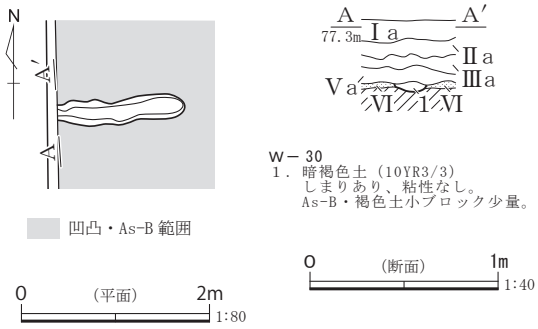
位置:X829、Y-211（８区）。西側と東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：Ｎ－88°―E。**規模**：全長［7.84］m、上端幅 0.13 ～ 0.24 m、下端幅 0.09 ～ 0.16 m、深さ 0.06 m。**形態**：東西方向に走向する。**底面**：標高は、北側は 76.91m、南側では 76.97m で北に傾斜している。**覆土**：As-B を含む覆土で埋没する。**時期**：覆土からみて中近世以降のものと考えられる。**備考**：機能については不明である。

４．土　坑

Ｄ－１号土坑（Fig. 23）

３区（X826、Y-201）において、覆土に多量の As-B を含む土坑１基が検出された。平面形態は、長径 0.36 m、短軸 0.35m の不整形で、深さは 0.11 m と浅い。遺物は検出されなかったが、覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。

Ｗ -30 号溝跡



Ｗ -31・32 号溝跡

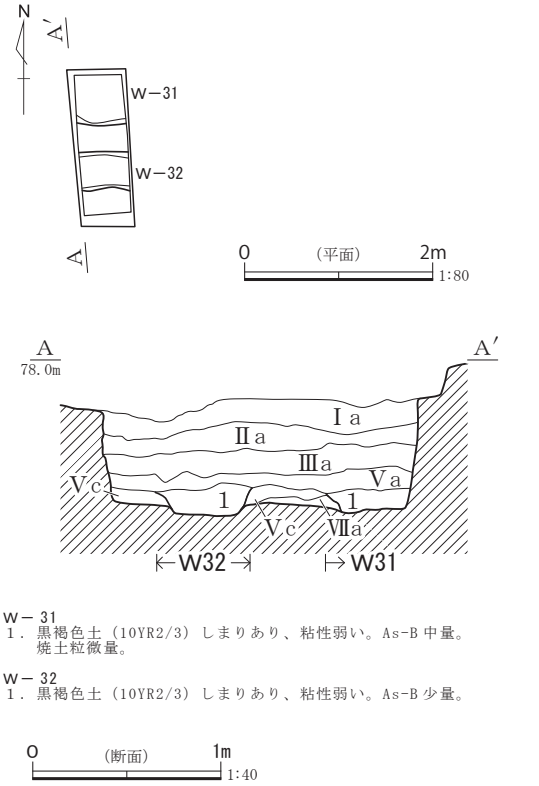


Fig. 22　溝跡（15）

Ｄ－１号土坑

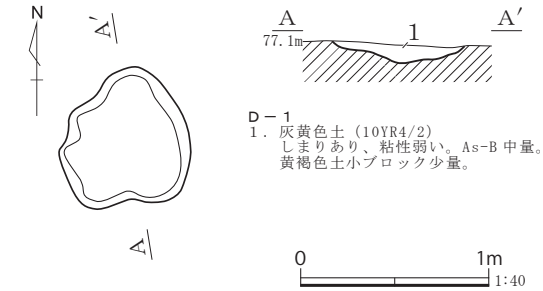
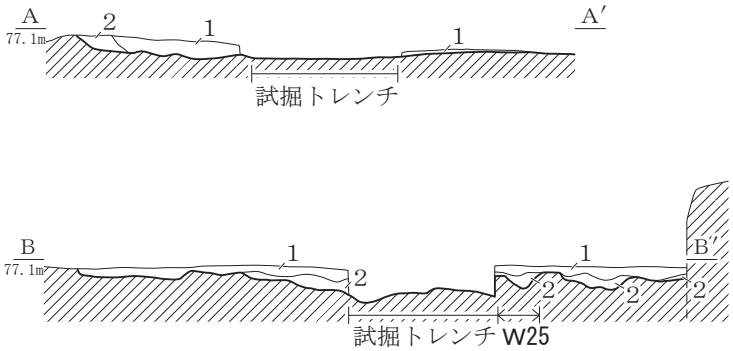


Fig. 23　Ｄ－１号土坑

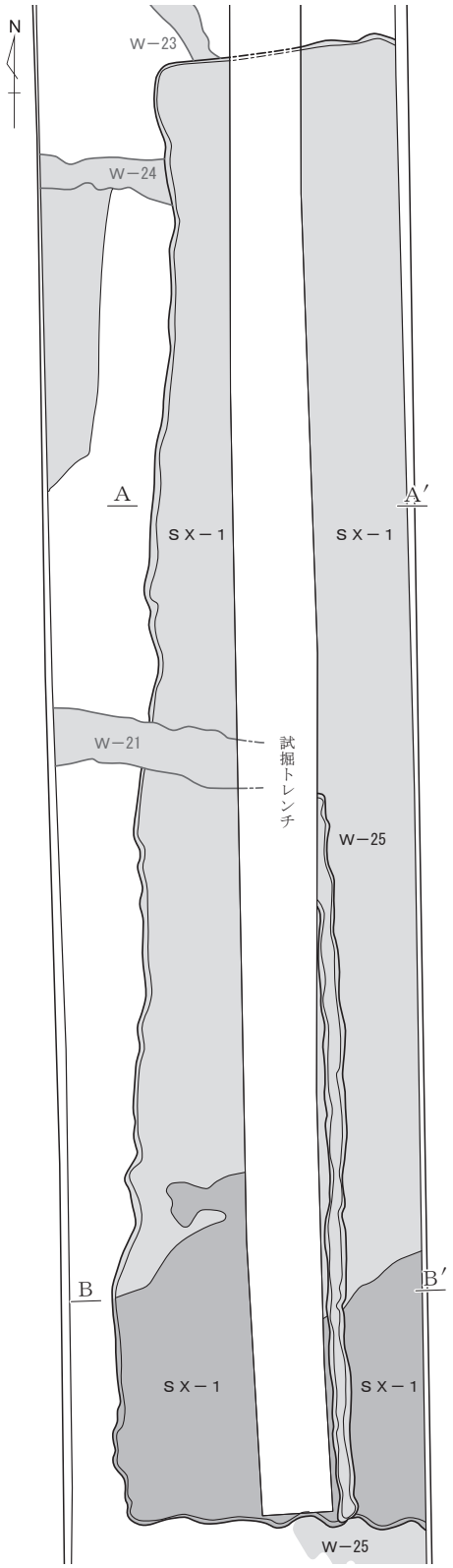
５．ＳＸ－１ (Fig.24, PL.4)

位置：X826・827、Y-183 ～ -187（５区）。東側は調査区外に延びる。**主軸方位**：N－0°。**規模**：南北長 16.09 m、東西幅北［2.46］m、南［3.36］m、深さ 0.12 ～ 0.15 m。**覆土**：As-B を多量に含む褐灰色土が堆積する。**重複**：W－ 21、W－ 23、W－ 24、W－ 25 と重複し、新旧関係は新しい順からW－ 21 → W－ 25 → ＳＸ－１ → W－ 24 → W－ 23 と考えられる。**時期**：覆土の状況から中近世以降のものと考えられる。**備考**：区画状に掘り下げられた範囲の全面が凹凸状になっていたが、特に南部の凹凸が著しい。遺構の性格に関して判断は難しいが、区画された範囲内であることや凹凸面が広がることから耕作地であった可能性も考えられる。



ＳＸ－１・Ｗ－25（Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′）
1．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり、粘性やや弱い。
　As-B 少量。
2．暗褐色土（10YR3/3）しまりあり、粘性弱い。As-B 中量。

0 （断面） 1m
1:40



顕著な凹凸範囲
凹凸範囲

0 （平面） 2m
1:80

Fig.24　ＳＸ－１・W -25 号溝跡

Ⅵ　まとめ

本遺跡から検出された水田跡、溝跡から周辺地の土地利用・景観の変遷を検討したい。

As-B 層下水田について

本遺跡西側周辺の現況条里痕跡はあまり確認できず、藤川沿いの地割は氾濫や流路の変更、また中近世に築造された環濠遺構群による改変の影響を受けた可能性が指摘されている（茂木 2021）。東・南側では現況条理が残存し、As-B 下水田跡が確認されている遺跡も多い。

今回の調査で As-B 軽石一次堆積層直下の水田跡（田面標高 76.9m）が調査区の一部で検出された。同時期の近隣水田跡としては、すぐ北西に位置する西善福録遺跡（田面標高 78.1 ～ 77.6m）、400m 程北東にある西三並遺跡（田面標高 77.5m）、800m 程東の前田遺跡（田面標高 77.0m）、500m 程南方に西善尺司遺跡（田面標高 74.5m）などがある。

上記の遺跡では条里プランに基づいた方形地割の区画としての大畦畔は確認されておらず、南方の徳丸仲田遺跡と中内村前遺跡などから大畦畔が検出されている。西善福録遺跡では東西の坪境が調査区の北端と南端に想定されている（Fig.27）。今回の調査で西善福録遺跡において想定されている区画の地割としての坪境畦畔の確認を行なったが、想定されている畦畔の検出には至らなかった。

検出された水田跡は、天仁元（1108）年の火山噴火後すぐに水田として復旧されることなく、放棄されたと思われる。このような放棄地は、前橋台地では一部を除いて後に畠作に転換したものが多いと言われている（群馬県史 1990）。

本調査で水田跡が検出されなかった範囲に関しては緩い起伏（特に１～３区のⅦａ層が堆積している範囲）があったことから、用水が引きづらく水田耕作が行なわれていなかったことが考えられる。しかし、中近世のある段階で水路の開鑿によって水田地の再開発が行なわれたと想定される。

中近世の溝跡について

今回、検出された溝跡は水路と耕作に関わるものに分別できる。耕作に関わるものと考えられる中近世以降の溝跡のほとんどが東西に並行して走向しており、条理制地割を意識した様相を呈する。近隣の西善福録遺跡でも同様の As-B が混入する覆土の溝跡が多数検出されている。１～３区の東西に延びる中近世以降の溝跡の底面標高は 77.4 ～ 77.3m で、６・12 区の水田面の標高 77m に比べて一段高い位置に存在する。溝跡の間隔には一定の法則性は認められず、流水の痕跡も確認できなかったが As-B の包含量の度合いから多少の時期差があると考えられる。詳細な機能については不明だが、畠の区画溝や耕作の痕跡と考えられる。

水路に関係すると考えられる溝として、中近世から近現代までのＷ－１、Ｗ－２、Ｗ－ 36 といった並走・重複する溝跡群が検出され、標高が相対的に低い位置（底面標高 76.9m）に開鑿されている。西善福録遺跡で検出された 20a・ｂ号溝は東西方向からＬ字に南方へ屈曲しており、Ｗ－１・２・36 の溝群と連続するものと想定される。流水の痕跡が認められ、溝の走向方位も一致し、時期的にも整合する。これらの水路に関しては、明治初頭の『壬申地券地引絵図』[注1]に記されており、微高地沿いに北方から取水していることが窺える。昭和 49 年[注2]の空中写真ではこの溝は確認できず、おそらく昭和 40 年代頃の圃場整備事業で埋められたものと推測される。

以上のことを踏まえると、本遺跡でも平安時代までの地形に制約された土地利用から、中近世に入って新たな用排水路の開鑿という土木的な対応によって地形条件を克服した土地利用（金田　1992）がなされた可能性が想

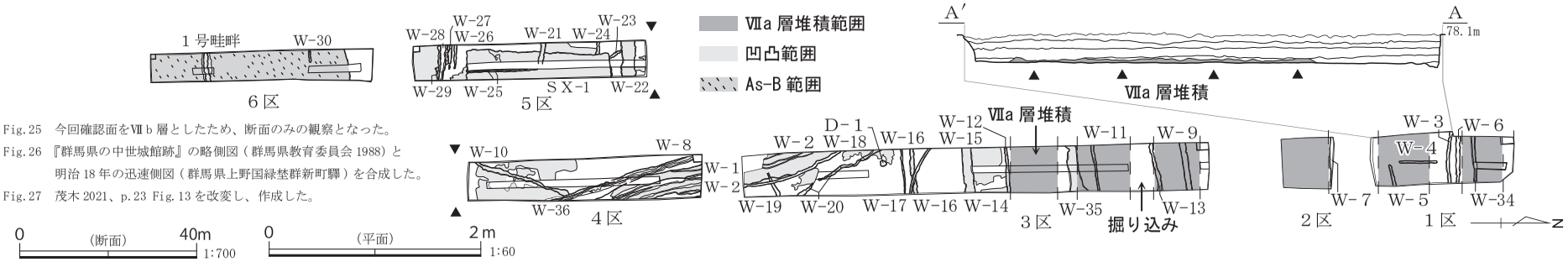


Fig.25　今回確認面をⅦb 層としたため、断面のみの観察となった。

Fig.26　『群馬県の中世城館跡』の略側図（群馬県教育委員会 1988）と明治 18 年の迅速側図（群馬県上野国緑埜群新町驛）を合成した。

Fig.27　茂木 2021、p.23 Fig.13 を改変し、作成した。

Fig.25　1～3区　Ⅶa 層堆積と掘り込み範囲

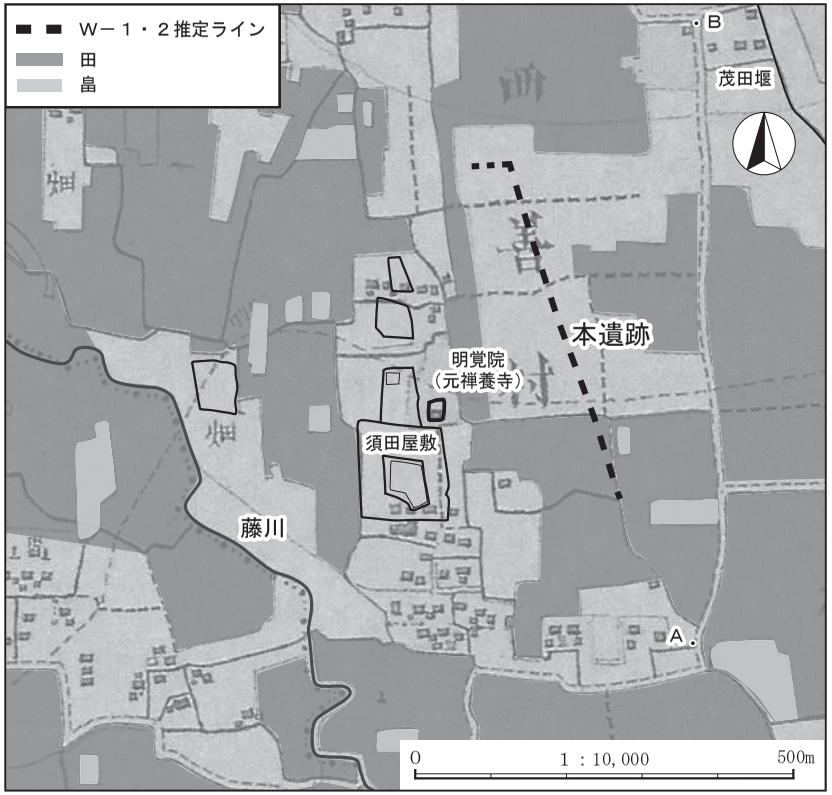


Fig.26　本遺跡周辺の耕作地と環濠遺構群

Fig.27　本遺跡周辺の条理制地割と中近世の溝跡

定される。明治期には用排水路の周辺は下田（麦作）や畠地として利用されていることから、緩い起伏のある範囲が中近世から近代にかけて水田化する工程の中で平坦化されていったと思われる。ＳＸ－１や１～３区で見られる帯状の掘り込みも、こういった過程に付随するもので水田 / 畠が混在する耕作地帯として想定される。

なお、Ｗ－１で検出された木杭と礫については（Fig.10、PL.5）、漁撈と係るものとして捉えることができるかもしれない。用排水路での漁撈活動は以前から知られており（前橋市史 1971）、その一例として、ドジョウやウナギを捕獲する罠として筌（ウケ）が使用されていた。河床に設置した筌が流されないように筌の脇や上に石を置いたり、水深の深いところでは途中に台を作って固定する方法もあり（秋山 2007）、このような目的のために設置された可能性が考えられる。

環濠遺構群について

最後に、今回検出された中近世以降の溝跡Ｗ－１、Ｗ－２の開鑿の背景には、近隣に位置する環濠遺構群と関連が濃厚であったことが考えられる。本遺跡の西側には南北に帯状に微高地が延びていて、その上に環濠遺構群が広がっている。この中の旧西善環濠遺構群には 16 世紀頃の須田屋敷と明覚院（元禅養寺）が立地していたことが知られている（山崎 1988）（Fig.26）。大局的にみると環濠遺構は、耕作地の開発としての灌漑から始まり、環濠は後発的な形態として出現し灌漑用水としての機能を合わせ持つ一方、社会情勢の変化による時代の要望から防禦機能が強化されたものもあると言われている（飯森 2015）。水利に関わる秩序を大枠で体現したのは寺家ともいわれ、水利権をめぐる村落間序列が環濠構築の決定要因になった可能性も指摘されており（藤岡 2002）、こういった視点からの検討も今後の課題と思われる。

注１：明治５～６年上野国那波郡西善養寺村の壬申地券地引絵図を参考にした。

注２：国土地理院の空中写真閲覧サービス、1974/12/31（昭 49）空中写真を参照した。

参考・引用文献

秋山靖世　2007『利根川の漁撈：中流域の漁法と漁具：群馬県佐波郡玉村町五料区』さいたま民俗文化研究所編

飯森康弘　2015「環濠屋敷をめぐる研究動向と地域状況」『群馬県玉村中世史研究』第一号　玉村中世史研究会

石守　晃　2004「鎌倉時代那波群のとある屋敷－中内村前遺跡３区屋敷遺構を中心に－」『かみつけの里博物館第 12 回特別展　1108 －浅間山噴火－中世への胎動』

金田章裕　1992『微地形と中世村落』吉川弘文館

木村茂光　1992『日本古代・中世畠作史の研究』校倉書房

山崎　一　1988「上野における中世城館特色」『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会

群馬県史編さん委員会　1990『群馬県史』通史編１

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001『西善尺司遺跡』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『中内村前遺跡（１）』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『中内村前遺跡（２）』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『徳丸仲田遺跡（２）』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005『中内村前遺跡（３）』

玉村町教育委員会　1993『藤川前遺跡』

藤岡英礼　2002「中世後期における環濠集落の構造－大和の中世の環濠集落を中心に」『新視点 中世城郭研究論集』村田修三編　新人物往来社

前橋市教育委員会　2017『山王若宮Ｖ遺跡』

前橋市教育委員会　2001（平成 12 年度）市内遺跡発掘調査報告書

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988『西三並遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1991『前田遺跡』

前橋市南部第二土地改良史編集委員会 / 編　1994『前橋南部土地改良史』

前橋市史編さん委員会　1971『前橋市史』第一巻

松本喜臣　2023『鶴光路油免遺跡』有限会社毛野考古学研究所

溝口常俊　2002『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版

茂木佑輔　2021『西善福録遺跡』技研コンサル株式会社

矢口裕之　2001　徳丸仲田遺跡（1）－縄文時代草創期編－北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

矢口裕之　2023　公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 41

和久拓照　2012『朝倉工業団地遺跡群』有限会社毛野考古学研究所

歴史的農業環境閲覧システム https://habs.rad.naro.go.jp/

国土地理院　https://www.gsi.go.jp/

写真図版

調査区遠景（南東から）

作業風景（南から）

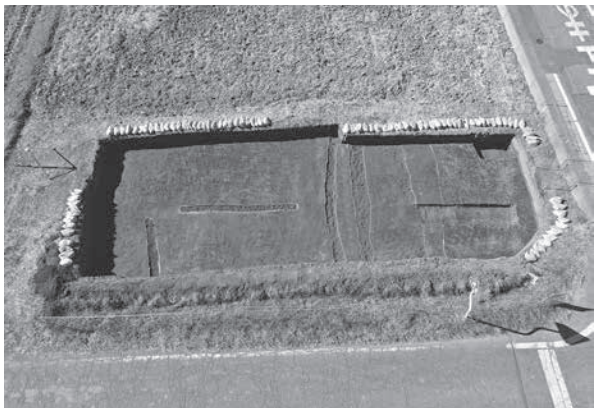
全体

1～4区

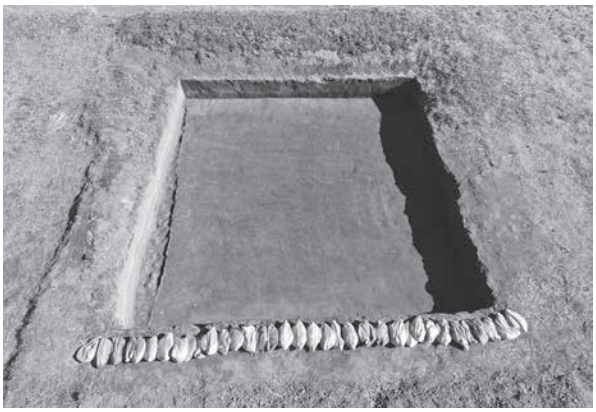
4～6区

10～12区

調査区全景（上が北）



１区　全景（東から）



２区　全景（西から）

３区　全景（北から）

３区　Ｗ－９・13　全景（東から）

３・４区　Ｗ－１・２・８・10・18～20・36　全景（北から）

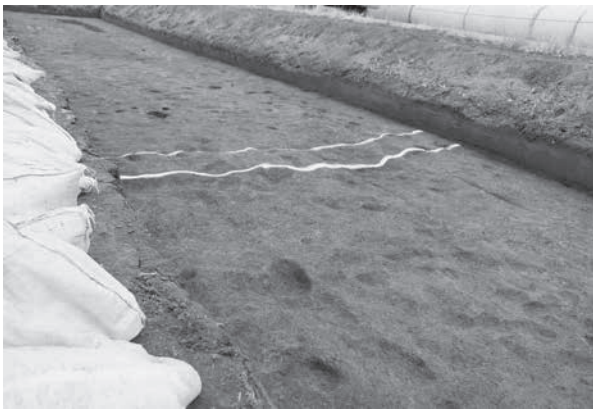
３区　Ｗ－ 15 ～ 17　全景（東から）

４区　Ｗ－１・２・８・36　全景（北から）

５区　Ｗ－ 21 ～ 25、ＳＸ－１　全景（北から）

５区　Ｗ－ 26 ～ 29　全景（東から）

６・12 区　１・２号畦畔　全景（南東から）

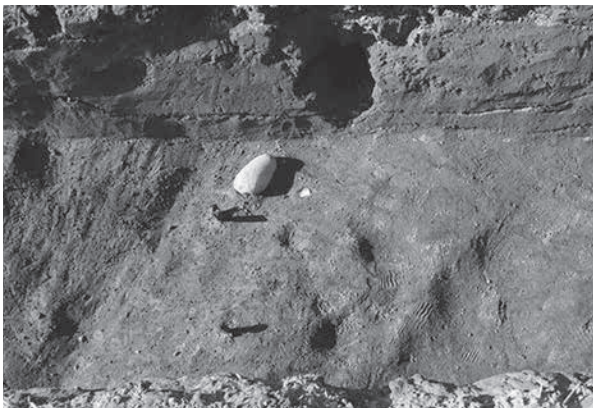


６区　１号畦畔　近景（南西から）

６区　１号畦畔　断ち割り断面（東から）

６区　１号畦畔　断ち割り断面（西から）

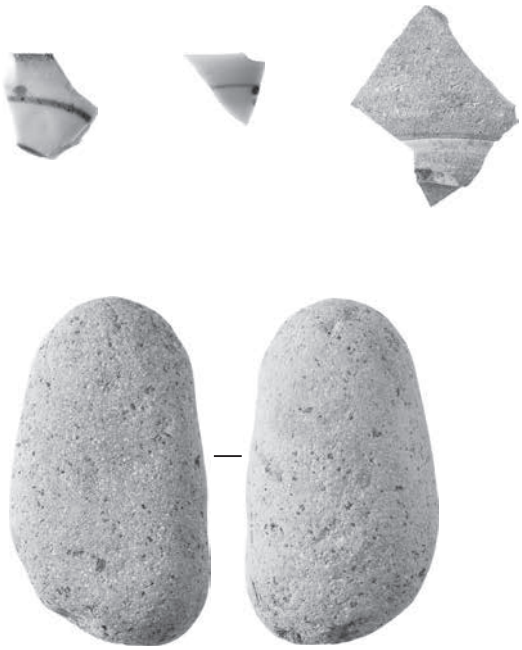
11 区　Ｗ－１・２・33　全景（北から）



11 区　Ｗ－１　遺物出土状況（木杭・礫・陶磁器）

基本層序４　土層断面　４区（西から）

基本層序６　土層断面　６区（西から）



Ｗ－１号溝跡

Ｗ－36 号溝跡

出土遺物

抄　　録

フ　リ　ガ　ナ	ニシゼンビシャモンイセキ
書　　名	西善毘沙門遺跡
副　書　名	道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
編 著 者 名	並木史一　上原真澄
編 集 機 関	有限会社毛野考古学研究所
発 行 機 関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３－11－４　℡　027－280－6511
発 行 年 月 日	西暦 2024 年３月 13 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西善毘沙門遺跡（にしぜんびしゃもんいせき）	群馬県前橋市（ぐんまけんまえばしし） 西善町（にしぜんまち）948-1・2、949-1・2・3、950-1・2、951-1・2、952-1・2・3、953-1、966-2、967、968-1、969-1、970、971	10201	5G80	36° 34′ 10″	139° 11′ 93″	20231108 ～ 20231225	850	道路築造工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西善毘沙門遺跡	生産跡	平安時代	水田跡 畦　畔　　２条	土師器 須恵器 陶磁器	As-B 層直下の水田跡
		中近世以降	溝　跡　　36 条 土　坑　　１基		

西善毘沙門遺跡

道路築造に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

令和６年３月６日印刷
令和６年３月13日発行

編　集／有限会社毛野考古学研究所
発　行／前橋市教育委員会
前橋市総社町３-11- ４
℡　027-280-6511
印　刷／朝日印刷工業株式会社